南洋群島
珊瑚島探險記

29-356

岡 雷 平 著

南洋群島 珊瑚島探檢記

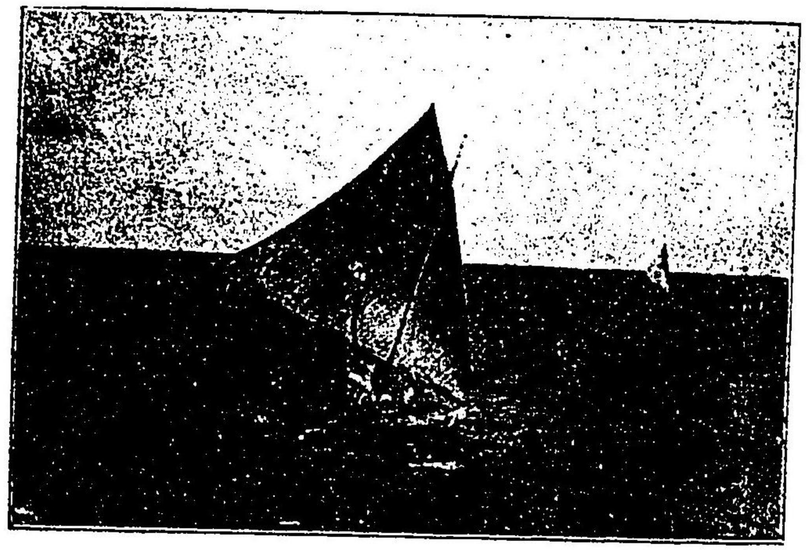
明治
43.12.8
内交

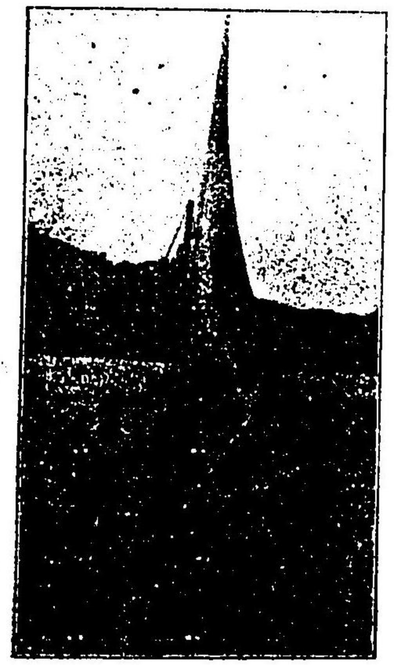
サイパン島カナカ土人

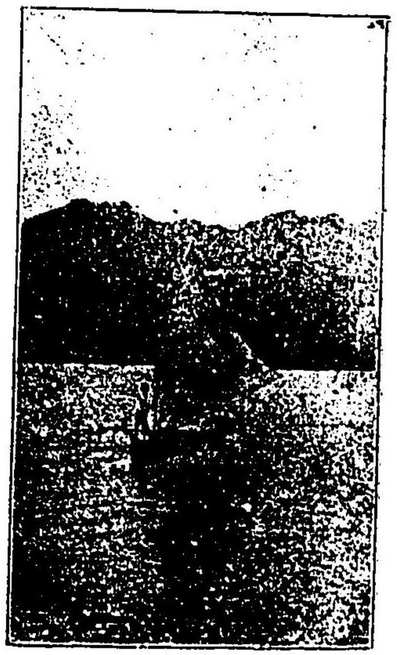
婦人

男子

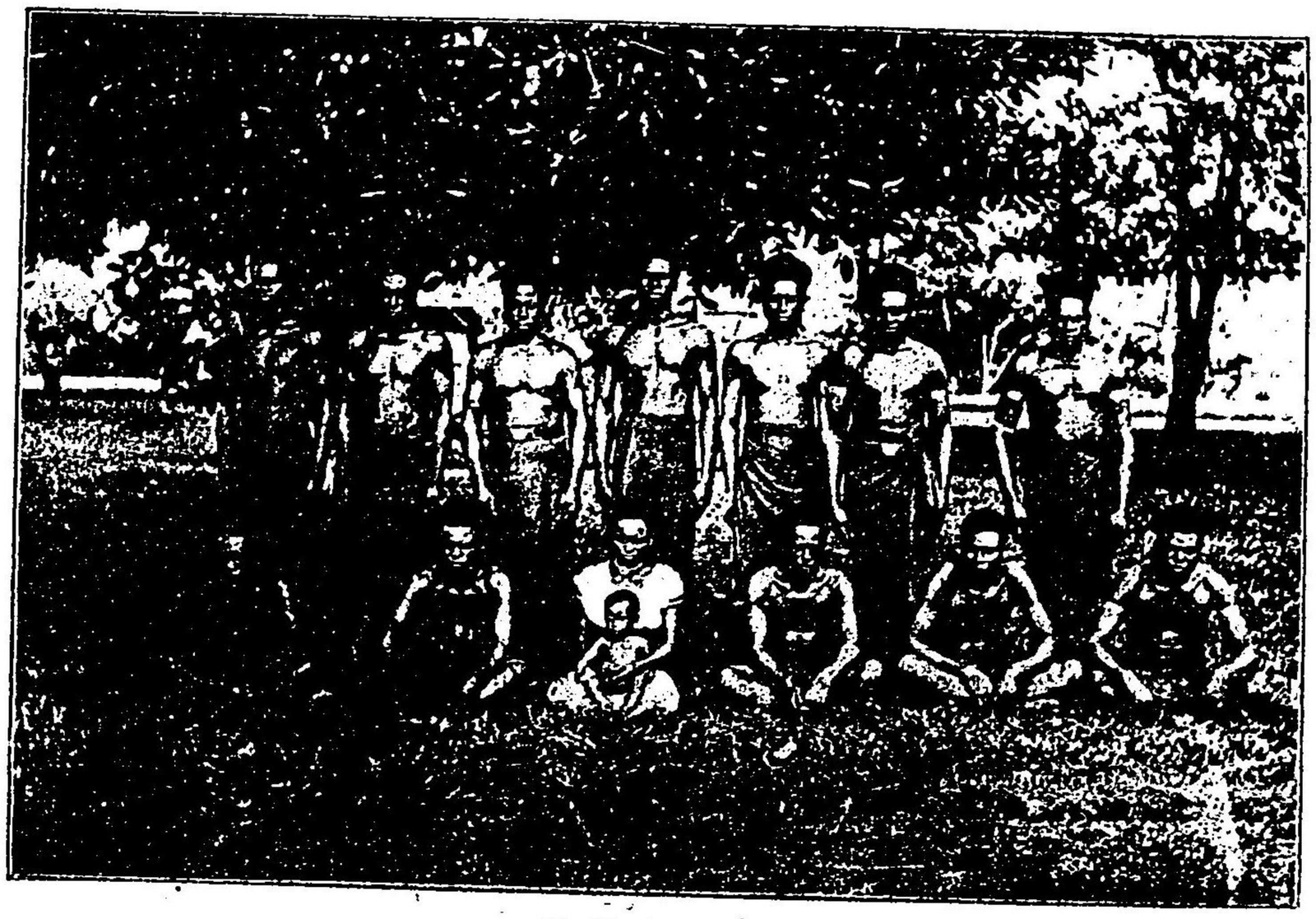
ロンヂラッヂ島獨木舟





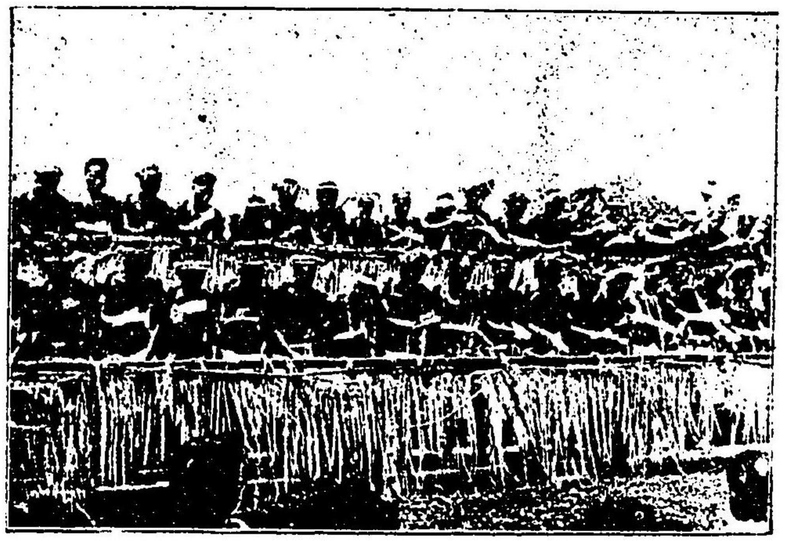


ク ー サ ィ 島獨木舟



暎人々種土民兵

ポネピー島マタラニーム族舞踊



喉人々種の舞踊

ク　サ　イ　島

ボネヒー島土人の女とニウヤニア土人の女

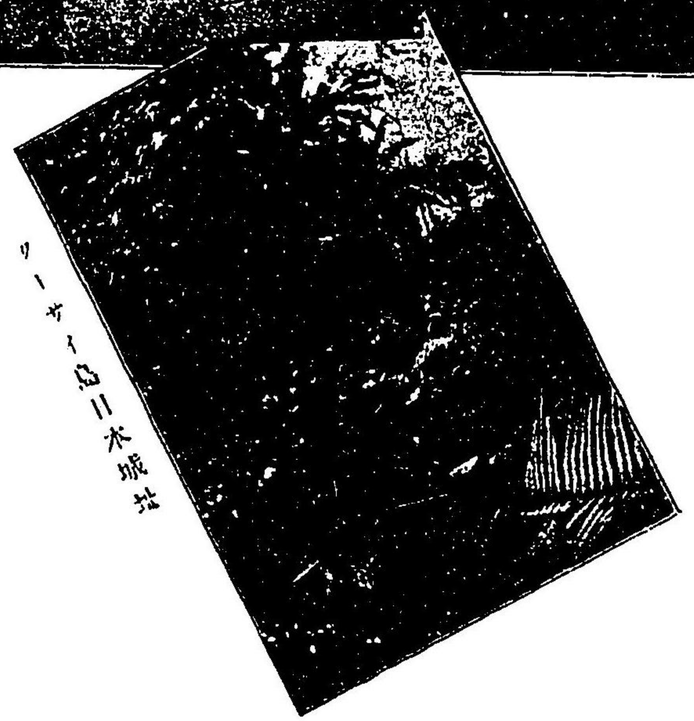
ケーサイ島ナヤレー王家族と著者

サイパン島カロリネ土人

サイパン島ナヤモロ人

ポホピー土人と著者

ケーサイ島レレ村



ケーサイ島二本椰子

序

岡雷平といふ奇態な名刺を始めて受取つた時、一寸讀み方に困つた、何だか變名らしく思はれた、變名だとすれば此ンな奇態な字を選ぶ人は變な人物に相違ない、眞面目な人とは思へぬ、多分不平家らしい、屹度脊矮くのづんぐりむつくりだ、ガン〳〵大きいばかりで分り難い聲を出して、斷定澤山で筋路の立たぬ話を浴びせ掛るだらうなど、

考へながら、兎も角お目に掛つてお話を承つて見ると、大違ひ〳〵。

極めて眞摯な、引締つた、隙のない嚴丈な、丈の高い立派な男兒で、低いながらも力の籠つた聲で、順序だつた、緻密な話をする謙遜な人であつた。

此の本の標題を見たり、廣告を讀んだりする人は或は例の見て來た樣な法螺か、若くは圖書館仕立の縷縷織かとおもふであらう、併し一たび繙いて見たら意外に驚くであらう、書中に記す所は、悉く著者が親して經歴した所で實事實情に非るはなく、而かも其觀察の多方面にして且つ奇警なること及び趣味と實益とに富んで居る、つまり本書は著者の才と學と勇氣との反映である。

本書は南洋の事を記するに止まれども、著者は尙ほ極北の雪山氷河に關する豐富なる實驗を有して居る、世間には隨分探檢家の名を博して居る人があるが、著者の如きは探檢家の名なくして、却つて其探檢と智識とに於て宏博な珍しい人である。

併し著者を以て探檢家とのみ思つて居たら、讀者は更に驚くの日があるだらう、つまり奇態な人に違ひない。

明治四十三年十一月

友人　澁川玄耳

凡例

一、海に關する著書汗牛充棟も啻ならずと雖も、概ね海を叙するに偏、且、大に失し、却て讀者をして海を恐怖せしむるの嫌なきにあらず。予の之を憾とするや久し。之れ予の便乘記を公にして、親しく實驗したる所を傳ふる所以なり。

一、予はやまと新聞記者として、雲鷹丸に便乘し、本篇收むる所は同紙上に連載したるものなり。船中悃愊の間に屬したるの文、固より章句をなさず、意に滿たさる所多しと雖も、現下予は塵事勿忙、推敲に暇あらず。舊稿を其儘に錄したり蕪雜の文は讀者請ふ之を寛恕せられよ。

一、雲鷹丸はバーク型補助機關帆船にして、總噸數四百四十八噸二五。水産講習生の漁撈實習及船舶運用練習用として

四十二年四月大阪鐵工所にて新造したる農商務省水産講習所の所屬船なり　而して乘組員は船長淺利孝爾氏、漁撈長黑田九萬男氏以下六十四名の外、予と勝伯と便乘したるなり。

一、後篇北太平洋東部珊瑚島の探檢は友人長友寛氏が、漁撈長として親しく經驗したる事實を、予が聽取して、曾て朝日新聞紙上に掲載したるものなり。而して之を追加したるは總ての記事を併せて北太平洋に於ける珊瑚群島を網羅すればなり。

一、此書の編成は、友人岡本綺堂君の盡力に負ふ所少からず則ち玆に其厚情を謝す。

明治四十三年十一月

著者識

南洋群島珊瑚島探檢記目次

(一)北太平洋西部群島巡航記

甲板の小禽……一
海上の閻魔大王……七
孤島の鬼……一五
勇壯なる鰹漁……二二
土人の舟……二八
寢てゐて喰へる國……三五

海上の新年……四二
王と會見……五〇
日本城址……五七
神樣の蒲燒……六六
孤島の住人……七二
喫人々種に對面……七八
二十年前の南洋貿易……八七
日本人の墳墓……九三
南洋第一の富豪……一〇〇
奇々妙々の土人踊……一〇六
手巾と石鹸の雨……一一三

サイパン島の日本語……一二〇
日本の姫さん……一二六
同胞の消ふ……一三二
金色の大蜥蜴……一三七
小さい横濱……一四五
グアム名物の鬪鷄……一五一
成功せる日本人……一五六
日本人の供喰……一六二
猪狩と鹿狩……一六九
琉球が見えた……一七六
琉球見聞記……一八一

首里城見物……一九一
故王宮……一九六

（二）北太平洋東部無人島の探檢

長途の航海……二〇五
壯絶快絶！……二〇八
島嶼の墓碑……二一二
四十三年の元日……二一六
其の昔燈臺……二二一
南天十字星……二二五

大小五十の島嶼……二二九
一個の難破船……二三三
無聊の絶頂……二三七

（三）南洋奇觀

海洋の魔島……二四一
海の女王―日本婦人……二五一
啖人々種……二六一
南洋土人の全滅……二六八
海の知識……二七三

目次

鹹水と淡水……二七九
無風帶物語……二八三
帆船航海の安全……二八九
帆船の乘組員……二九五

南洋群島 珊瑚島探檢記

岡雷平著

(一) 北太平洋西部群島巡航記

(一) 甲板の小禽

明治四十二年も暮れて行く十二月五日、我が雲鷹丸は故國の海岸を離れて、遠く南洋一萬浬の航途に上つた。

一行は五十四名意氣大に昂る。午前八時三十分、本船は三本の

檣に帆を捲上げ、北風に乘じて房洲館山港を心靜かに出た。洲の岬を更ると全く浮世と懸離れた船中生活が始まる。船大工の梅谷君は食料として積込んだ豚と鷄の小屋を建てる。午後五時三十分勝浦沖にかゝつた時に、小金丸教官の率ゐる一隊四人は、端艇を卸して秋刀魚の流し網を試み、風浪と闘つて二百廿九尾の大漁は門出の幸先好しと皆喜ぶ。

明れば六日、北風益々吹き暴れて大海の怒れる濤高く、船は三十度以上の傾斜をなして動搖すること夥多しい。半夜甲板に立つて眺むれば、星一つも見えぬ闇き夜に、船舷を洗うて碎くる浪は宛から瀧の如くに滔々と鳴る音凄まじく、其の波間に無數の夜光蟲が青く輝いてゐるのは更に物凄い。四百噸の帆船は黑き浪を破

つて東へ〳〵と走つて行く。實に壯絶とは斯の時の光景であらう。

風は毎日吹き續いて海は益々暴れる。食堂のテーブルの上に置かれた梓などは最早何の用を爲さぬ。大きな浪がドッと被つて來て、船が一搖れするかと思ふ間もなく、茶碗は轉げる、椀は倒れる。汁は飜れる、アンダリ開いた口へ箸を突つ込んだまゝ前へ顚る、と斯う書けば甚だ滑稽の樣に聞えるが、實際は却々笑ひ事でない。

寢ても起きても搖られ〳〵て八日の朝まだき、雀に似て更に小さく、全身青黃色の小禽一羽が甲板に飛んで來たので、水夫は直ちに生捕つた。恐らく鶸であらうと云ふ鑑定は付いたが、一體恁麼屠弱い小禽が渺々たる海洋の眞中へ何うして飛來つたのか、

鳥渡解らぬ。或は難破船の飼鳥ではあるまいかなど種々の想像說に時を移す間に、鵜は敢なく死んで了つたので、新井練習生は『名も知らぬ小禽の水葬』といふ一文を作つて、此の可憐なる小禽の運命を哭した。船中には詩人もあり文人もある。

小禽は死んだが疑問は殘つた。併し其疑問は淺利船長と黑田漁撈長との說明に因て略ぼ解決された。即ち東經百五十五度北緯三十二度とばかりで判然した事は解らぬが、兎にかく太平洋の眞中にガンジスと云ふ島がある。海圖にも記されてはあるが、未だ曾て其の島影を認めた者が無いと云ふ。航海船の往復頻繁なる太平洋上にも、名あつて形を見ざる幽靈島が存在するとは、不思議と云へば不思議である。然るに今日偶然に獲たる此の小禽は、或は

彼のガンジス島から飛び來つたのではあるまいか。

若し我が雲鷹丸に時日の餘裕があれば、長へに闇黑に葬られた彼の幽靈島を探り出して、太平洋上の航海に一光明を與へる事が能るかも知れぬものを、今は行手を急ぐ身の是非も無いと船中一同嘆息する。

其間にも海は絕えず暴狂うて空打つ浪は甲板から喫煙室へ濺り落ること二度三度。

十二日、國を去つて一週日の後、初めて風收り海穩かになつた。船は東經百五十七度五十二分北緯三十一度五分に在つて、我が房州館山を距る實に一千一浬である。航海千浬の祝ひとして、晝餐の卓子には牡丹餅を饗せられる。

明けても暮れても沙風に吹かれて、身體中が鹽鹹くなつてゐる我々には、甘い物が第一の御馳走で、開いた口へ牡丹餅どころの噺でない。牡丹餅と聞いては下戸も上戸も口を開いて待つてゐる位で、當分は船中其噂で持切る。

翌十三日は寒暖計七十一度で、館山出帆當時の四十八度に比して、廿三度も溫かい譯だ。何れも冬服を脱いで夏服と着更へ、身輕になつて甲板を飛び歩く。今日は出帆以來最も長閑な日で、大洋の浪駭かず、瞰上る蒼空には綿の如き雲が悠々として屯ろしてゐる。天も水も永久に眠つて了ふかと思ふばかりに靜穩な日だ。

船大工は此機會に乘じて船内の損所を修繕する。炊夫は豚小屋に餌を與る。炊夫部屋の傍には臨時理髮店が開かれる。學生の一團

は鱶釣の籠を作る。茶飲所では碁が始まる。勝伯爵の室からはハーモニカが聞える、喫煙室では船長漁撈長等が冒險談を闘はしてゐる。

斯る日に於る船中生活は實に平和で愉快で、陸上の人々の到底夢想し得ざる所である。

爾來引續いて天候平穩、溫帶熱帶の境なる無風帶を通過して、漸く熱帶に入るや、十六日の夕刻、彼の熱帶獨特のスコール（驟雨）が襲來した。

（二）海上の閻魔大王

炎熱暑くが如き南洋諸島では、此の驟雨の襲來に依て僅に暑氣

を凌ぎ得るので、土人等は天の恩惠廣大無邊なるを形容するにスコールなる詞を以てする位である。

其の來るや海天の一角に黑雲現はれ、油然として翼を擴げて來るのでソレ、驟雨だと船員一同は赤裸になり、手拭に石鹼まで用意して、今や遲しと待つてゐる。天は漸次に黑んで雨は沛然と降つて來ると、裸武者の一群は我先にと甲板へ躍り上つて、天來の大瀧を頭から浴びながら一生懸命に身體を洗ひ淨める。其中には穢れたシャツまで一所に洗濯と出掛ける智慧者もある。此の間僅に五分で、雨收れば忘れたやうな好天氣、併し此の五分間が我々の生命で、骨までも清くなつた樣な心持がする。

スコールに次で、夜の九時頃から南風烈しく吹出した。此の邊

の風力は五度以上に達する事無しと云ふに、今夜は稀に八度を示し、夜一夜吹て吹て吹通して、十七日の空高う晴れた。

空は晴れたが風は益々強く、海は愈々暴れる。際涯もなき碧空は、狂瀾怒濤に映じて一種の深綠色を呈し、彼の黑雲滿天の暴風雨當時に比すれば、一段と物凄い樣に感じられる。

其の大浪の頽るゝ間から、白銀の胡蝶の如きものが日に映じてヒラリ〳〵と飛び迷ふのは實に奇觀で、熟く視れば無數の飛の魚である。この魚は世界中殆ど見ざる所なく、大洋の眞中にも群を作して棲息する魚族は、殆ど彼等の他に無い。彼の怖るべき鱶と雖も、食物の關係上遠く陸地を離るゝ事は能ぬと云ふ。

十九日には熱帶に入るの祝ひとして、船中一同に汁粉の御馳走

が出る。海の旅行は陸の旅行に比べると甚だ單調でもあり、且無聊を感ずる場合が多いので、遠洋航海では何かの口實を設けて祝祭とか記念祭とか云ふ事を催る。殊に赤道を通過する場合に開かるゝ、赤道祭は、各國の船舶を通じて最も盛大なる海上の祝祭である。即ち船中で最も數多く赤道を潜つた剛の者を海王と崇め、恰も我が閻魔大王の如くに頰髭顎髯を着けさせ、箒に銀紙などを貼交ぜて長刀樣の物を作り、之を突つ立てゝ物々しく控えてゐると、赤道初航海の船員等は思ひ〳〵の化粧を凝して道化ながら其前に參拜する。果は此の『海の王』の命令に從つて、一人一藝を演ずる、一同思ふ存分の狂態を晒け出して騷ぎ狂つた末に、其日の食卓には能る限りの御馳走が出る。加之も其等の趣向は、一週

間乃至二週間前から工夫されてゐるのであるから、當日の盛況察し給へと、船長等は面白さうに語つた。

斯る船中の催しは、我國に於ても昔は屢々行はれたもので、觀音岬や犬吠岬の鼻を廻る時、又は門司や明石の瀬戸を通過する時には、初航海の者を捉まへて飛だり跳たり、種々の馬鹿騷ぎを行つたものである。

朝鮮や支那では今日でも盛に行はれてゐるさうだが、船中の無聊を慰めるには好い思ひ付であらうと思はれる。

我が雲鷹丸が今度の航海は、赤道を南下しないから赤道祭を行ふ譯には行かぬが、其代りに回歸線祝を催しては何うかと云ふ說も有つたが、遂に沙汰止となつた。

熱帶に入つた本船は、北東の貿易風に送られて七八浬の快速力で南に進む。

貿易風は毎年其の時期を誤らず、風力も亦一定してゐるので、帆船は帆を絞つたり捲たりする面倒なく、一定の順風に帆を孕せて、豫定の期日に豫定の地點へ到着することが能るのである。

廿日の空は夜に入つて一天拭ふが如くに晴れ渡り、半夜甲板に立つて振さけ見れば、陰暦七日の弦月斜めに懸つて、無數の星は燦として輝いてゐる。

もう此の邊へ來ると北斗星は北の空に低く落ちて、日本では名ばかりを聞く南方十字星は、水平線上の南に現れて、四個の星は恰も十字架の直立せるが如くに光を放つてゐる。月よりも明かな

りと云ふ太白星即ち彼の木曜星は今宵其影を現はさぬ。シリアス及びカノーパスと云ふ二個の恒星は、海に映じて小さいながらも一條の銀波を曳いてゐる。俗に云ふ三つ星は地球赤道の直上にありて、北斗星と共に航海者に取つては大切な星である。

昔し亞剌比亞の牧者が羊の番をしてゐる夕、限りなき天空の星を仰いで幻の如き空想に耽つた。其の物語りが傳へられて、希臘の詩人が世にも美しい詩に歌つてゐる。

即ち三ッ星の上と下とに強く輝く五ッの星を結び付けて、雄々しき獵師が劔を佩ける姿を畫き、之をオライオンと名けて可憐なる一條の戀物語を傳へてゐる。オライオンの南に光る一等星は、彼が山野を跋渉する時常に牽き行く愛犬シリアスで、犬星とも云

ふ。其の北に米粒の如き七ッの星の一團は、スバルと云ふ處女で、惡魔の爲に身を誤り、大王ジエピターの怒に觸れて身をオライオンの膝下に隱し、只管其の寛恕を待つて居るのださうな。未だ其他に處女に擬せられたメロペーもあれば熊とか駝鳥とかに擬せられた星もあるが、是等のお講釋は此處らで切上げて、海洋上の星月夜は雄大で且神秘的であると云つて置かう。

晴夜碧空を仰いで萬顆の球と凝つた燦々たる星を指し、其の數幾何ぞと問ふた時河原の石は幾つだと反問した昔話がある。が最近の計算に依ると、吾々普通の視力で七千を數へる事が能る。若し十二倍位の望遠鏡で見るならば、五萬に及ぶさうである。其等恒星中最も地球に近い星は南方十字星の傍に在るアルハー、セン

チユーリで、其光線は三年を費さないと地球に達しないさうだ。而して光線一秒時間の速度は十八萬三千哩、一ヶ年に五萬億哩であるから十五萬億哩の距離を算する譯となる。北斗星の如きは五十年後に始めて其の發する光線を吾々が認めるのださうであるから、如何に其の距離が遠いかを想像されるであらう。

(三) 孤島の鬼

廿一日の午後二時、北緯十九度半に位する米領ウエーク島の東四十浬を通過した。

此島からはミクロネシヤに屬して、一行五十四名は茲に初めて南洋の人となつたのである。此の一島は珊瑚礁から成立つて、東

西廿浬南北八浬……と云へば相當に大きい島のやうに思はれるが、其實は幅員半浬に足らざる貝殼岩が圓を描いてゐるので、其中央は一望渺々たるラグーン（礁湖、即ち珊瑚礁に圍まれたる湖水を云ふ）を作してゐる。加之も島の高さは海拔八尺を出でず、灌木が徒らに繁茂してゐるのみである。併し水鳥は樹木に止る事が能ぬものであるから、斯る裸島を擇んで彼等の棲家とするので、毎年十二月頃の產卵期になると、全島殆ど餘地なき迄に各種の水鳥が八方から群を作して集まつて來るのが習ひである。

之に就て一條の物語を聞た。横濱某商會の鳥毛採收船が一昨年此の島へ來つて、捕鳥の人夫十八名を上陸せしめ、本船は近海に於て鰹漁を試みつゝある間に、一日暴風雨の襲ふ所となつたが

低き島根の悲しさに山なす激浪は全島を洗ひ去つて、上陸中の十八名は逃るゝ途なく、哀れ南洋の孤島に不歸の鬼となつたと云ふ。

蕞爾たる此島も、斯る悲慘の歷史を有つてゐる。

船は既に南洋に入つて、拮梗色したる海を只管に南へ走る。島が近いとは云ひながら其の片影も見えず、縹渺として際涯もなき海の眺望は一段と明かになつた。其日の夕刻一頭の鰯鯨が我船と逐ひつ逐はれつ戲れながら泳いで來る。ソレ鯨だと云ふので甲板は俄に賑ふ。併し此度の航海は鰹と飛の魚漁が目的であるから、捕鯨の道具を準備して居らぬ。唯アレアレと云ふばかりで何れも指を啣へてゐる始末。勝伯爵は悶しさに堪らず、小銃に實彈を籠めて射擊すると、確に脊骨の眞ッ只中に命中したが、對手は鯨だ

悸ともせぬ、悠々として浪の彼方へ泳ぎ去つたのは忌々しい。

此の時は溫度既に八十度以上に上つて、空に蟠まる雲の峰は宛然に盛夏の趣きを示してゐる。東京は師走の空ッ風が吹き捲る時節であらうに、船の人は團扇遣ひに忙しい。

夜は更けて翌午前二時、陰曆十二日の月が西の空に斜ならんとする頃、之と反對なる東の空に紅鼠色の虹が現はれて、木曜星の上に交叉された。二個の虹は聽て一線の半圓となり、約一時間餘にして消え失せた。夜の虹は晝の虹はどに複雜の色彩を放たぬけれども、色は寧ろ鮮明である。

廿三日、東經百六十七度十九分、北緯十五度五十一分の海上に於て飛の魚漁を試みた。これは俗に流し網と稱して幅三尋長さ六

十尺に達する網を流し、恰も小鳥を捕ふるにかすみを用ふるが如くにして進み、彼等を追ひ捲つて網に懸けんとするのである。併し此の邊りは魚が薄いと見えて三艘の端艇が約一時間の漁で、獲物は僅に四尾と云ふ不結果に了つたのは遺憾であつた。

廿五日の正午にはロンヂラップ島の最北端を距る實に三十五浬の所に達し、今夕四時頃には島が見える筈だと云ふので、淺利船長は前檣に三十分間交代の見張番を置く事を命じた。大海を走る船は或一定の方針を定めて、羅針盤と睨み合つてさへゐれば、マア事が濟むのであるが、イザ島の附近へ來つたといふ段になると、帆檣にも、船橋にも、甲板にも、幾多の双眼鏡が現はれて、前後左右に深き注意が注がれる。サア斯うなると出發以來風雨に

曝されて、明けても暮れても海ばかり眺めてゐた、一行は何となく活氣を帶びて、話の調子までが高くなつて來る。

折しも數百の權頭鯨が群を作して、白泡を嚙みながら泳いで來たが、此の場合誰も顧みる者もなく、鐵砲好の勝伯すらも双眼鏡を握り詰めたまゝで南を睨んでゐる。

船長の豫想は分秒も狂はず、午後四時の鐘が響くと同時に前檣から口笛が聞えて、『島見ゆ』とある。素破やと一同は甲板に走り出で『何處に……何處に……』と云ふ。何さま波間に見えつ隱れつ青一髮、これぞ目標地のロンヂラップ島である。

元來此の島を目指して來たのは、此の島蔭に船を踟躕（前檣と後檣との帆を交叉して船の進行を停め假碇泊する事を云ふ）して、

鰹漁を試みる爲であるが、日已に低うなつてゐるので迂濶に不知案内の島へ近づく譯には行かぬ。殊に此島が珊瑚島である以上は、珊瑚礁が何んな風に蜿蜒として、海中へ突き出て居ぬとも限らぬ。そこで島を一度認めて其位置を確めたる我本船は、成べく島根へ接近せぬやうに斜めに西へ向つて再び徐行し始めた。

其夜は月明かに浪平かであつたが、淺利船長と黑田漁撈長とは一睡もせずに暗礁を警めてゐた。館山港より此に至る航程實に二千五百廿九浬。

吾人の目前に横はつてゐるロンヂラップ島に就ては、餘り正確なる事實が世間に知れ渡つて居らぬ。隨つて幾多航海者の報告も、各自其云ふ所を異にしてゐるのである、

(四) 勇壯なる鱶漁

前にも云ふ如く此のロンヂラップ島は、獨逸領ではあるが餘り正確な事は世間に聞えて居らぬ。米の船長ハドソン氏は、三角形を作したる數個の低き島及び沙角を有し、島地は藪を以て掩はるれど椰子の樹無く、季節に依りては眞珠及び正覺坊を獲べきも、他には何の獲る所もなき無人島なりと云ひ、同國のドクトル、ガリック氏は、百廿人樓息せりと云ひ、露のコッゼブー氏は、低き草木繁茂したる珊瑚礁の群島にして、風景佳く其中央に礁湖ありと云つて居る。

何が果して事實であるかは僕が此島に到るに及んで判るであら

うなどゝ思ふ中に、其夜も明けて廿六日、今日は晴れて平穩なる朝で、遠き海の果には夏霞立籠め、渺々たる浪は紺碧の色を湛えて、未だ眠が醒めぬかの如くに眠つてゐる。

船は朝日影と共に滿帆の風を孕んで、徐々と島根に向ふ。山科一等運轉士は前檣のロヤル（最高の帆）のヤードに登つて手に双眼鏡を放たぬ。船長は虎髯を海風に弄らせて舵手に號令を傳へる。老練家を以て斯界に知られたる黒田漁撈長は、船橋を右に左に歩みながら海上の注意を怠らない。

船が進むに連れて、幾多の島は點々として甲から乙へと現はれ來り、更に瞳を凝せば、白波の飛沫を吹いて、天を打つのも見える。是は珊瑚礁の張詰めてゐる爲で、迂濶に近寄るのは危險であ

るから、二浬ほども島を離れて西に進むこと三四十浬。こゝにも島があつて、實側の結果ロンヂラップ島の西隣に位するアイリンヂナル島と知れた。

元來珊瑚島は、海中に隱れたる珊瑚礁を以て、互ひに連結せられ、或は十五浬も廿浬も間隔を保つて、一大輪廓を描いてゐるのもあるので、遙に望むと他の島々と區別の付かぬ場合があるのだ。

斯う地勢が解つて見れば、ロンヂラップ島の南西へ行くには、アイリンヂナル島に近く南の沿岸を東に取るの他はない。船は其針路を取つて進む。アイリンヂナル島の何れの島にも毒々しい程に、綠濃き雜草が一面に繁茂して、其の島の數は九個、幅員は皆十間位で、最も長きものも半浬に過ぎぬ。

浪に洗はれたる珊瑚礁の砂は、南洋の太陽に強く反射して、白き砂と青き草とは、鮮明なる色彩の配合を見せてゐる、但し此のアイリンヂナル島は確に無人島であると判つた。

今夜は暮の廿六日と云ふ、且は久し振で陸地を見たと云ふ祝意を兼ねて、甲板上で餅搗を始める。とは云へ船中には臼も無ければ杵も無い。こゝが實習生諸君の苦心を要する所で先づ有合せの桶の底を強く止めて臼の代用に充てる。杵は端艇の帆檣で間に合はせる。搗人は猿股一個の素ッ裸で代る〴〵に搗き立てる。斯くして正月の餅は南洋の海上に於て製られたのである。

夜の十時、ロンヂラップ島の南西沖に達したので、端艇を卸し、長田教官指揮の下に實習生十名は勇ましく鰹漁に出發した。

僕も三號艇に乘組んで其一行に加はつたが、船中で見るとは大きな相違で、今までは浪平かなりと思つた海も、イザ小艇で乘出すと大浪の蜿りは十間餘に及び、宛ら黑き大水牛が脊を擡ぐる如くに、絕えず艇を搖かしてゐるのだ。

やがて本船を二浬ほど離れた沖合まで乘出して浮標を流す。浮標は枯木の丸太三尺位のものを廿本ばかり繼いで、之れに赤い旗五本を樹て、其旗の動き工合に因て鰹が餌に付いたか何うかを判知する仕掛で、端艇の乘組員一同は深き注意を以て浮標の左右を漕ぎ廻る。狗實習中の事であるから、其一人は風浪等の危險を慮かり、本船の信號燈を監視して進退すべき役目を掌つて居る。併し漁撈長の話によれば、出漁中の者よりも、本船内に在つて絕え

ず端艇の行動に注意し、萬一の過失無きやう遙に眼を配つてゐる方が却つて非常の苦勞だと云ふ。

約三十分も過ぎたかと思ふ頃、ソレ喰つたと云ふ見張番の聲と共に、何れも端艇を漕ぎ寄せて見ると。鈎に懸つた鰹が縱横無盡に暴廻るのであらう。流石の浮標も右へ左へ曳かれて動く。其の呼吸を計つて曳や〳〵と糸を手操ると、鰹は愈々怒つて狂つて、浪を破りつゝ水面へ近いて來る。其の煽りは船舷を拍つて急雨の如くに散る浪を浴びながら、乘組の勇士は今か〳〵と手具脛引いて待つてゐる。

暴れに暴れたる鰹は曳れ〳〵て、水面から三四尺下まで來たと思ふ頃、此方は手頃の銛を把り、頭を目がけて發矢と擊込めば、

海は忽ち腥き血を漲らせて、彼も少しく怯んだらしい。其機を外さず協力して一氣に引揚げる。この數分時の働きは實に目覺しいものだ。

此の如くにして常夜釣上げた鱶は總計十八頭、最大なるは長八尺にして重量四十貫に達したのもある。一同凱歌を揚げて本船へ取つて返したのは翌午前三時頃。

(五) 土人の船

本船に戻ると、實習生は直に獲物の料理にかゝる。即ち鱶の鰭は切つて干して支那向の食料品とし、皮は剝いで銅版に用ふるゼラチンの原料とし、肉は食用として鹽漬にする。斯くして實習生

二十名は、安全にして且勇壯なる實地修業を試み得るのである。

鱶漁は先づ右の如くに成功したが、扨其次に起つたは水の問題で、水の上を旅行してゐながら、飲料水に不自由を感ずるのは、長途航海の習ひであるから、船中では飲料以外、一滴の水と雖も濫に費さぬ樣に注意してゐるが、其れでも一人一日平均二升五合づゝの淡水を消費する。就ては今我が眼前に横はれる島に、若し飲料水を發見し得らるゝならば、一行に取つて大なる幸福と云はねばならぬ。

併し此島は獨逸領で、北緯四度三十分から十二度半に亘つて三十有餘の珊瑚礁から成立してゐるマーシャル群島の一であるから、群島の首府ジャルウィット政廳の許可無くして猥に上陸する

譯には行かぬ。

困つたものだと云つてゐると、翌る二十日の朝霧まだ晴れやらぬ頃、あなたの岸から白い帆を張つた小舟が一艘見えた。續いて二艘三艘と漸次に現はれて、都合七艘が我船に向つて走り來る。

アレ〳〵舟が見えたと、一同甲板に集つて見渡せば、舟は南洋獨特のカノーである。

今までは無人島とのみ信じてゐたに、是は又意外である。望遠鏡で窺へば、七艘のカノーには三四人づゝの土人が乘つてゐて、中には女らしいのも二人ばかり交つてゐる。土人！　土人！　眞逆に我々に對して戰ひを挑む譯でもあるまいなどゝ噂する間もなく、彼等の舟は近いた。

猿股を穿いたのもあり、古ズボンを穿いたのもあり、其の扮裝は樣々であるが、上衣を被てゐる者は一人も無い。色は勿論飽までも黑いが、骨格と云ひ顏付と云ひ、日本人に酷だ似てゐる。加之も鼻下に八字髭を貯へて居る分別らしいのも控えてゐる。女は體軀こそ小兒らしけれ、華美な色合の洋服を着け、漆の樣な黑髮を襟に結んで後に垂れたる姿は、却々ハイカラに見えるが、惜むらくは口唇の厚いのが眼に立つ。

兎にかく別に惡意も無いらしいから、手眞似で此方へ上れと云ふと、彼等は應する色なくドヤ〳〵と甲板に上つて來たが、扨一向に詞が通じないには弱つた。彼等には我々の詞が可笑ひと見えて、一種形容の出來ぬ不思議の笑を洩して、左も恥しさうに、左

の手を口に當てながら譯の解らぬ事を云ふ。

對手は何か笑つてゐるが、此方は却々笑つてはゐられぬ。何とかして意思を疏通せしめたいと、先づ獨逸語で話し掛けて試たが些とも通じない。更に西班牙語、英語と片ッ端から饒舌り付けたが、一向に手應へがない。殆ど閉口してゐると、一人の若い土人がイエスと云ふ。這奴話せるぞと八方から取卷いて、英語で話し掛けたが、何を云つてもイエスで持切つてゐる。此方も悶込んで『お前は英語を判らないのか』と日本語で云ふと、其の返事は依然イエスだ。

既う此上は手眞似で話すより他に方法は無い。潮風に吹かれて眞黑な員と、其れに足をかけて黑い土人とが、約一時間も妙不

思議な手眞似の會話を試みたる結果、双方の意思は先づ朧げながらも通じた。

彼等の手眞似に據ると、此のロンチラップ島は十三の島から成つて、其の最も大なるをオロンゴ・ロップと云ひ、彼等は其處に住む者で、島には飲料水もあれば食料もあるから、物品と交換しても可いと、斯う云ふのである。

それぞ此方の望む所で、若し果して飲料水が有るならば、相當の價を以て買入れる意であるが、何分にも例の手眞似であるから其眞僞が好く判らぬ。兎に角其實地を見屆けて來ようと云ふので、僕は唯一人カノーに乘つて土人の部落へ進んだ。

幅は二尺、長さは八尺に足らぬ獨木舟に乘つて不知案内の島に

上陸すると、彼等は前に云ふオロンゴロップ島の北岸中央部で、椰子の樹の蓊鬱と茂れる岸邊に一部落を爲してゐる。

僕の姿を見ると等しく、半裸體の土人等がバラ〳〵駈けて來たが、唯惘れたやうな顏をして遠卷に眺めてゐるばかり。僕は敢て騷ぎたる氣色を見せず、徐ろに帽子を脫つて額の汗を拭いてゐると、彼等の中から五十餘歳の老土人が徐々と進み出で、先づ握手を求めて、片言ながら英語で挨拶する。

是は村長と牧師とを兼たる島中唯一の大學者ラブウィア老で、『我々は六年前獨逸の軍艦に依て、首府のヂャルウキットから移住せしめられた者である。此の幅員二町延長二哩の小島が我々の天地で、他とは殆んど交通の途無く、而も此のロンヂラップ島

は南洋諸島中最も貧乏な島で、果實は椰子とタコ以外に何物も無い。自分等の着てゐる衣服は其昔しヂャルウキットに在つた時に得たもので、今は既に破れたものが多い。就ては何か衣服樣の物と交易を願ひたいが如何でござらうか。』

諄々として說く所、土人と雖も侮るべからず、其應對頗る巧みである。

(六)　寢てゐて喰へる國

ラブウィア老が諄々と說く所、いかにも御道理で事情は能くお察し申すが、我々の船は貿易船ではない、交易は國法の許さぬ所である。若し此島に飲料水が有るならば、相當の物品を以て買入

れても可いと云へば、

『イヤ飲料水とては一滴もござらぬ。此の島人は椰子の實の汁を以て飲料に充てゝ居るので、椰子の實は花の頃に傷けて置けば酒が出來る。其の酒は一週間の後に自然と酢になる。又た實が熟すると二升位の清水を貯へ、其の緣にクリームの如き粘膜が出來る。これが我々の常食で、實に天下一品と申すべく、其の清水は後に蜜となつて、遂にカステーラの如きものとなるのでござる。』

との話。一個の果實が斯くまで種々に變化して、全島人の生命の綱となるとは、實に天恩と云はねばならぬ。併し飲料水が無いとあれば長居は無用、モウお暇と立ちかゝれば、

『今日は水曜日だから教會堂へ是非お越し下され。』と云ふ。

此の孤島に教會堂とは珍しい。然らば一度拜見と、ラヴウイア老に導かれて、貝殼を踏みつゝ村の東端へ辿り行く、會堂は椰子の林に圍まれて、島中第一の大建築である。間口は三間半で奥行は六間、床はタコの木の幹で組まれ、莚はタコの葉で編まれ、中央の一段高き教壇には、古い六角時計が懸つてゐる。屋根はタコの葉で葺いてあるので、庇洩る椰子の葉風涼しく、俄に汗の乾くを覺えた。庭前に立つて見渡せば、ロンヂラップの礁湖は一望の中に收つて、小島の青き影は點々として遠く近く相連り、實に風光明媚と云つても可い。

老人は軈て教壇の傍にある法螺貝を把つて高く吹立つる。これは祈禱の始まる報知である。

老人の説明に據ると、基督教は餘程以前から傳道されたものらしい。二三年前までは、米國傳道教會のモーニングスターと云ふ帆船が時々巡航し來つて、教理を説いて廻つた爲に、今日では冠婚葬祭總て基督教の儀式に依り、暦も亦用ふる樣になつたと云ふ。

斯の如き遠い島根にも暦日はあるのかと思つて、先づ貴老は本年お幾歳にならるゝかと尋ねると、其返答に曰く、

『我々の生れた頃には年齢と云ふものはござらぬ。先づ三十か四十か五十位でござらう。』

所謂仙人とは、斯う云ふ風の人を云ふのであらう。併し其の仙人も基督教に依り、外人との接觸に依て漸次に人間に近いて來るらしい。斯んな事を考へてゐる中に、全村の土人は法螺の音を相

圖にゾロゾロ集つて來る。

全村の人間と云つた所で、男女小兒を併せて五十人に足らぬ。勿論留守居の必要は無いから、乳呑兒を抱き、小兒の手を曳いて、家内總出といふ光景。持參の聖書は紐育の聖書出版會社の刊行で、マーシャル語を以て記されたものだ。

軈て一同集ると、男女左右に分れ、何れも床に足を投出て坐る。僕も隅の方に胡坐を掻いて控えてゐると、其中に讃美歌が始まる、祈禱がある、説教がある、萬事が日本の教會と差異がない。殊に祈禱の終に臨んで低い聲に力を籠め、アーメンと結ぶ工合など、頗る森嚴の趣がある。

説教は約一時間で了つたので、僕はラブウイア老に別を告げ、

メーシーと呼ぶ土人の獨木舟で本船へ歸る事となつた。

海岸へ出る途中一軒の土人家屋を訪ふと、主人は未だ歸らぬと見えて空明だ。家内は僅に二坪位で、天井の高さは三四尺に過ぎぬ、迚も眞直に立つては歩かれぬ。柱は椰子の樹、屋根も、壁もタコの枯葉、他には床と云ふものも無く、小さい貝殼を一面に敷詰めて、彼等は此の上に裸體のまゝで轉寢をするのだ。

奥の薄闇い所に海員の常に穿くズボンが吊上つてゐる。これは其昔し鯨船が南洋に出沒した頃に、物品と交易したもので、今では其用をなさぬ迄に古びてゐるが、自ら衣服を作る事を知らぬ土人は、鯨船が南洋に其姿を沒してより十餘年後の今日に至るまで、依然として此の古ズボンを唯一の財産としてゐるのである。思へ

ば憫れむべきものでも有るが、又一面には羨ましいほど暢氣なものである。

假令其衣服にこそ斯る不自由はあれ、食物に就ては何の心配も苦勞も無い。門へ出て鳥渡手を伸せば、椰子の實の甘いのが取れる。それが飽たらタコの實を咬る。加之も是等の果物は年中絶えず實るのであるから、何日何時でも勝手に食放題で、所謂『寢て居て喰へる』と云ふのは此事であらう。

斯る氣樂な土地で、年齡などを數へる必要があるものか。普通の人間社會では、大晦日もモウ三四日の後に迫つて居ると云ふ今日此頃に、彼のメーシー君はボンヤリと口を開いて、僕の後に立つて居るのだ。繁劇などと云ふ詞は、恐らく此島にあるまいと思

ふ。

さて歸らうと立ちかゝると、足下にガサガサと走る物がある、オヤッと身構へして熟視ると鼠一匹！　此島には二十日鼠ぐらゐの黑鼠が幾萬となく棲息して、群がる蠅と共に島中を横行してゐるのだと云ふ。

約一時間半ばかりも此處に徘徊の末、愈々飲料水なき事を確めたので、メーシー君と共に三浬の海上を本船に漕戻つた。此の邊の海水は實に透明で、二十尋の水中に游ぶ魚の影さへ歷々窺はれる。

(七)　海上の新年

南洋の海水が透明であるのは、海に珊瑚蟲が多く棲んで、水中の浮游物を食ひ盡すが爲だと云ふ。併し海水では何にもならぬ。愈々こゝで飲料水を得られぬと決れば、長居する必要はないと見て、本船は三十日の朝、北緯五度に位するクーサイ島に向ふべく帆を捲き揚げた。

北東の貿易風に送られて、船は紺碧の海を七八浬の速力で南へ駛る。

明くれば大晦日で、寒暖計は八十九度、松飾も注連飾も無い船中では、明日が元日と云ふ氣色も一向見えぬが、流石は人情で、何れも髭など剃つて男振を上げる。

クーサイ島までは航程四百五十浬であるから。二日の朝でなけ

れば入港は能ぬ故、新年の卓子は其時に開く事と定め、先其準備として、先に館山出帆の砌り買入れたる二頭の豚を牽出し、血液の循環を良好ならしむる爲に追廻す事となつた。實習生の幾名は手に〳〵箒や竹刀を携へ、豚小屋から彼の二頭を牽出して、縱横無盡に追ひ卷る。

吉元機關長は館山以來朝夕に餌を與へて彼等を飼育し、豚の親友を以て自ら任じてゐる程であるから、此の活劇悲劇を見るに忍びず『切て撲るだけは堪忍して呉れ。』と嘆願する。

恁る騷ぎの中に暮れたる大晦日の夜は、星一つだに見えぬ眞の闇、更けて十二時、十六點の除夜の鐘（十二時は普通八點であるが除夜の鐘は二倍の十六點を打つが習慣である）は東經百六十四

度三十一分三十秒、北緯七度五十三分二十二秒の太平洋の海上で餘音を波に殘して響いた。

四十二年は茲に離別を告げて、四十三年の初春は來たのである。

朝の食卓には一同新らしき服を着替へて、兎も角も御慶を交換する。併し元日だからと云つて、風も吹けば浪も立つ。容易に遊んでは居られぬので、當番の者は交る〳〵甲板に出て、平日の通りの勤務に服せねばならぬ。

午後から天候險惡となつて、例のスコール（驟雨）が襲來すること再三再四これぞ時に取つての若水だと、何れも威勢好く甲板に飛び上つて行水を遣ふ。元日のお降りを若水と稱し、加之も之で行水などは恐く他に例があるまい。

二日の朝未明には已にクーサイ島の北十浬の所に近いた。甲板に出でゝ遠く望めば、從來の珊瑚礁とは全く違つて、山峰巍然として聳えたる一大島嶼である。本船は午前八時、徐々として其東岸レレと云ふ港に入つた。

此のクーサイ島は、獨逸領カロリン群島の最南端に位して、東經百六十三度九分北緯五度にある。周圍廿四浬、カロリン群島廿四島中で、珊瑚島でないのはポネピー島と此島ばかりである。モウ此處からは赤道直下まで僅に二日の航程を剩すのみだ。

船は漸次にレレの港内に入ると、島巒の積翠は萬頃の蒼波に映じて先づ旅客の眼を慰める、其處とも分かず生茂れる芭蕉の葉末から炊煙白く颺るを見ても、土民の火食する事が想像される。

殊に目立つのは、岸邊に近く聳えたるゴチック式白堊の高樓である。村の中央からは我が日章旗に對して、獨逸國旗が朝風に翻つてゐる。本船が投錨し終つた時、港内に横はれるレレ島から、一艘の獨木舟が白人と土人とを乘せて漕付けて來た。

土人は白の詰襟服を着た老人で、白人は美髯を短く刈込んだ活潑な男。白人は自ら名乘つて米國人メランダーと云ひ、既に廿六年の久しき間此島に住む商人であるが、未だ國籍を獨逸に移さぬと誇りがに云ふ。

土人はクーサイ島の酋長でキング、チャレーと仰せられる。既に王といふからには、我々も相當の敬意を拂はねばなるまい。

此のチャレー王は、今や古稀の齡を過ぎて、齳て八十歳にも達

せらるゝかと見受けるが、確に幾歳と云ふ事は王自身も御存知ないのである。失禮ながら風采は甚だ揚らず、身長も僅に五尺を越えず、面長で眇で常に首を少しく傾けて一言云ふ毎に齒を剝き出す癖がある。併し英語は可成達者で、若い時には鯨船に雇はれ、日本の函館にも行つた事もあると云ふ。誠に人の善さ相な人物で本船が三日間こゝに碇泊して、飲料水を汲む事を許可せられたのみならず、僕に對しては特に日本人の古城址を訪ふ事、及び米國傳道婦人經營の學校を訪ふ事等の便宜を與へられた。斯くて王は一旦歸館せらる。

前日來の豫定であるから、此日の午餐に於て船中は新年のテーブルを開き、乘組員五十四名は熱帶の孤島に芽出たく新年を迎へ

たのである。

日盛の午後一時、僕は丁度來合せたる土人のカノーに打乘つてレレ島のチャレー王を訪ふた。

村の中程に、石垣を三四間ほど突き出して棧橋とした所がある其處から上ると、岸に沿うて疎ながらも人家が兩側に建列んでゐる。土人も裸體の者は尠く、何れも縞シャツにズボンと云ふ輕快なる扮裝で、英語も餘ほど話せる、西班牙語も解る。珍らしげに僕を眺めて居る小兒に、キング、チャレーの家は何處だと聞けば別に臆したる狀も無く、ソレ其處だと指さして敎へて呉れる。萬事が世馴れて居て、ロンヂラップ島の如き野蠻の風は少しも見えぬ。

(八) 王と會見

チャレー王の館は、村内でも人家最も稠密の所にあつて、廿坪ばかりの狹小なるものである。周圍には石垣を廻らして、門際には天を摩する護謨の大樹高く聳え、其の繁れる下枝には一個、青銅の鐘が懸つてゐる。又其の傍には黑板が懸られ、土語で何やら書いてあるのは、恐らく掲示場と云ふ譯であらう。門内には小石が一面に敷かれて、中央に旗竿が樹つてゐる。

爪先上りに行くこと十歩にして早くも家に達すると、荒屋でこそあれ、頑丈な材木で床を張詰め、廻り縁の欄干は白ペンキを以て塗られてある。

跫音で知つたか、チャレー王は奥から出て來て、英語で『入れ』といふ、御免を蒙つてツカ〳〵入る、家内は八疊位の室を二に仕切つて、入口に近いのが客室と云のであらう。粗木で組だ椅子二脚が古い卓子を圍み、其正面には硝子盃の無い六角時計が懸つてゐるが、時間は餘ほど狂つてゐるらしい。壁には死刑前の基督や山上垂訓の寫眞版刷の繪が、無雜作にベタ〳〵貼り付けられてある。奥の室にはタコの葉で編んだ筵を敷いて、王子王女であらう十二三歳を頭に四人の小兒が遊んでゐる。左なきだに風通しの好くない家作りの上に、熱帶の太陽は庭の小石に反射し、室内までも目眩い位で、拭へども止らぬ汗が湧く、日本ならばお茶一杯といふ格で、椰子の實に吸ふだけの孔を明けたのを出して呉れる。

炎暑の折柄とて御遠慮致さず頂戴して、談話は先づ村のことから始まる。

『現今の島民は五百人に滿ないで、全部此レレ村に住んでゐる。コッケル港對岸のタマレック村には、總計三十人位は住んでゐるだらうが、其他は全く無人の境である。王のお若い時分には、到る處の港灣に多數の土人が住み、鯨船の出入も亦頻繁であつた。現に此のレレ港には、一時三艘の帆船が錨を卸した事も屢々あつたが、獨逸領となつて以來、僅に三ヶ月に一度位づゝ濠洲通ひの汽船が水汲に寄港するのみで、他とは全く交通の途が杜絶して了つた。加之も廿年ほど前に惡疫流行して、二ヶ月餘の間に全島の人口が四分の一ばかりに減じた。まだ其れのみならず、六年前

（明治三十八年）の四月には前古未曾有の大暴風が襲來して、家も樹木も悉く吹き飛ばされて了つた。私の家も以前は彼の樣に立派なもので有つたが、右の暴風の爲に跡も止めず破壞された』と嘆息しつゝ指さす方を見ると、宏大なる洋館の寫眞が一枚置かれてある。

王の懷舊談は却々に盡きない。王は更に嘆息して云ふ。

『彼の鯨船が屢々寄港した時分には、島民皆これに雇はれて勞働に從事し、金も儲ける、欲い物も得られると云ふ次第であつたが何分にも鯨船の出入絶えたる後は働くべき所がない。少し許りの椰子の實をメランダー（米國人）君に買つて貰つて、燐寸や布を得る位が關の山、殊に獨逸政府では一人に對して六マルク（一マ

ルクは我が四十七錢餘）の人頭稅を課するので、家內十人の者は六十マルクを納めねばならぬ。而して、椰子の實の相場はと云ふと、六百個僅に四マルク位のものである。これでは島民も年々窮境に陷るばかりだ、御察し下さい。』

聲も濕み眼も濕んでゐる、聞けば何さま氣の毒な話、斯る處に來つて劈頭第一に生活難の聲を聞かうとは、實に意外の感に堪へない。

南洋の絕島にも浮世の浪は容赦なく押寄せて來るのか。

王の愚痴話が途切れた時に、丈高く肥滿して血色若々しき四十前後の婦人が、乳呑兒を懷いて跣足で入つて來た。

これが王妃と王子である。初對面の挨拶相濟んで、王妃は獨逸

製の小皿に、花瓣の凝結つたやうな黃色の果物を程好く切つて佇められる。一片摘んで見ると栗の如く、燒芋の如き味ひがする。

王妃の說明に據ると、是はブレット、フルーツと云ふ果實で、其大きさは一抱もある。之れを烏渡火に炙れば、直に此の味ひを生ずるもので、島民は日常の食物に充てゝゐるのだと云ふ。

此他にも果物は頗る豐富で、芭蕉、パインアップル、パヽヤ、レモン、マンゴ及び蜜柑の如きものは、四季を通じて到る處に實を結ぶので、食物に不自由する樣な事は無い。殊に椰子の實は人間を養ふばかりでなく、豚も鷄も犬も猫も蟹も、地に落ちたる其實を拾ふて生きて居る。

其麼風で食物に困らない爲めに、人間も自然暢氣で、月夜には

一村殆んど眠る者無く、夜もすがら海岸に踊りつ唄ひつ遊ぶを例としたが、基督教の渡來以後は踊を禁止せられて、今日では唄さへ碌に覺えて居る者は無くなつた。隨つて日曜日は木實を採らず教會堂に終日集つて讃美歌を唄ふの他には何等の遊戯も無いと、云ふ事である。

王の談話は兎角に悲觀的であるが、吾人の想像したる南洋土人としては、其の言ふ所に一々相當の理窟があると思ふ。彼是二時間ほどの談話で汗は上衣まで滲み透る、何分にも暑くて堪らないので、再會を期して一旦辭し歸る。

門を出ると、太陽の強い光線は一面に照付けて、近眼の僕は眩しくして歩けぬ位。

(九) 日本城址

王の邸宅から歸る途中、二三の民家を訪うたが、何方も柱には木材を用ひ、又た床をも設け、家屋の構造は彼のロンヂラップ島などよりは遙に進歩して居る。加之も庭には捕鯨船に用ふる製油の釜あり、家内にはハンドル、ミシン機械あり、其他にも幾多文明的の器物を見受けた。其の中の一軒では、廿歳ばかりの女が縞金巾の小兒服を縫つてゐるのを見たが、ミシンの使用方など却々巧者なものだ。女の着衣は全く洋裝で、襞なども器用に取つてある。

是等も皆な捕鯨船出入當時の榮華の形見かと思ふと、何となく

心寂しいやうな感が起つた。

斯日は船に歸つて、翌る三日、再び島の朝露を踏み分けて、所謂日本城址なるものを訪うた。

土人の傳說に據れば、其昔日本人がこゝに來つて、數年に亘る大戰爭を續けたと云ふ。

村の往還を眞直に行つて、彼のメレンダー君の門前から右へ折れ、路もなき草原を踏分けて三四十步辿り行くと、苔の香は人に逼つて、石壁の一角は忽ち我が眼前に現はれる。

高い城は海岸に近く築かれてあるが、コニヤア樹の深林は深く鎖して、之に近くまでは殆ど窺ひ知る事が能ぬ。

正門と覺しき所から入ると、左右の石壁は高さ七尺幅三尺位

に大石を積上げ、一間餘の塹濠を隔てゝ內城の石壁と相對す。塹濠には手頃の石を殆ど寸地も剩さぬやうに敷き詰め、南より北に通じて末は河に接してゐる。內城の石壁は高さ一丈二尺で幅六尺東北の一角と北門の傍らに、物見櫓かとも見ゆるものが二丈に及んで高く築かれた址がある。石の質は俗に眞石と稱するもので、其大なるは確に七抱へも有らうと思はれた。

內城は二の丸と本丸とに分れて居たらしく、二の丸は廿間と廿九間の石壁に圍まれ、本丸は塹濠を隔てゝ其北にある。併し今殘つて居るものは石ばかりで、何物も址を止めて居らぬ。

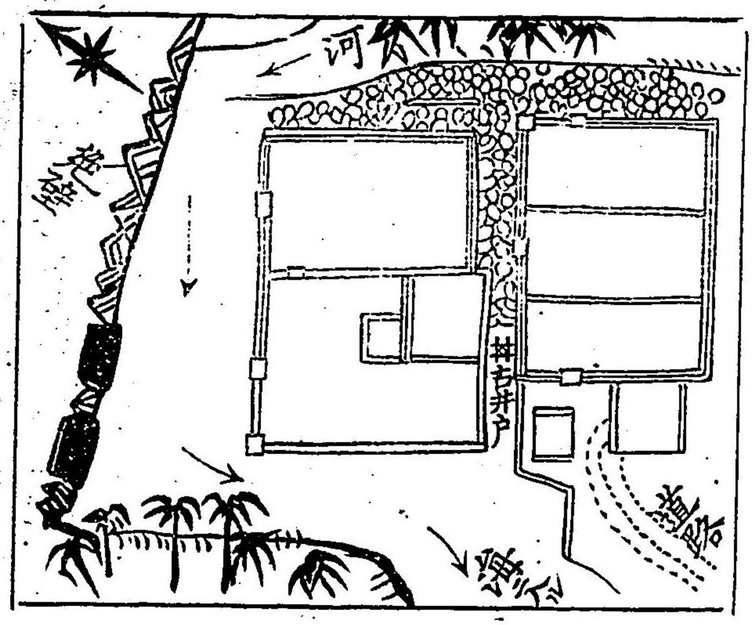
城內にはマルコ又はコニヤア等の熱帶植物が一面に高く聳え、其間に七尺大の金色の蜥蜴が、折々に奇聲を發して縱橫に走つて

居る。低い石垣が所々に不規則に積れてあるのは、昔の遺物でなく、近頃に至つて土人が豚を飼ふ爲に設けたものらしい。

本丸と二の丸との間に古井を發見したが、是れは四角形に堀拔かれて、木材も所謂井桁の形に組まれてゐる。土砂に埋もれて今は其の井の深さを知る事は能ぬが、試みに棒を突ッ込むと限なく入る。其昔幾多の勇士は此の水を汲んで、矢疵刀傷を洗つたのであらう。古い文句だが夏草や兵者共の夢の跡！　遠き南洋の古城址に立て此感が愈々深い。

この古城址は一町四方に亘つて、一見要害堅固で、又其の工事にも尠からぬ勞力と日子とを費したらしい。

若夫れ最北端の物見櫓に登つて遠く望まば、マルコやコニヤア



の大樹の鬱蒼たる林を通して、クーサイの本島を一眸の中に收め得べく、馬耳の如くに雙立するクロザーの山や、圓錐形の頂上が波の如くに起伏する千九百十二呎のプアチエ山や、幾多の峰巒重疊せるもの總て手に取るやうに見える。全體の地勢より案ずれば、此城たるや外寇を禦ぐが爲にあ

らずして、寧ろ外來の敵が更にクーサイの本島を窺ふべく、此のレレ島に築いたものかとも思はれるが、盲風怪雨こゝに幾百年、徒らに『城春草木深』の觀を止むるのみだ。城址の巨石は默して何事をも語らない。

さて茲に當然起るべき疑惑は、此の城が果して日本城址であらうか、日本人が果して此處に上陸したであらうかと云ふ問題である。

土人に問うても何等の口碑も存して居らぬ。併し城址の石壁及び塹濠等に就て考ふれば、此城は確に東洋流殊に日本流の繩張りである。支那風の城壁は圓形を普通とするに、此城は隅々に鋭角若くは直角を有してゐる。本丸に隣つて二の丸がある。前にも云

ふ如く井戸は材木を以て四角形に井桁を組んでゐる。

是等の結構に依て案ずれば、此城は先づ日本人の手に成たものと見るのが至當であらう。然らば何時の頃に何者が渡來したか、是が第二の疑問であるが、此種の築城法は日本でも古い事では無い。南北朝以後より漸次に行はれたもので、織田信長以來更に洋風を加へ、以て德川氏に至つたのである。南北朝の末より足利氏の中葉に亘つて、明の南海に寇したものは彼の八幡船で、彼は之を南倭と稱して頗る恐れてゐた。

其當時の日本人は四國九州から正八幡大菩薩の大旗を押樹て、舟を南海に泛べ、朝鮮及明の海岸を闊すること多年、其間には大志を懷いて遠く南洋まで乘出した者もあらう。或は潮流の爲に自然

漂着した者もあらう。是等の冒險隊が先づレレ島を占領し、之を根據地として更にクーサイ本島を併呑せんと巧んだのではあるまいか。

八幡船の帆影が絶えてから、更に起つたものは日本甲螺である甲螺の中には支那人も混じてゐたが、其主力隊は矢張日本人で、是れも屢々支那の南邊を驚かした。殊に秀吉の全盛時代には、外國船の交通が開けたと同時に、日本人も呂宋、瓜哇等所謂南蠻の事情に就ては頗る明るくなつた。隨つて交易船を出す者もあり、或は之を征討せんと企てた者もある。其當時の日本人の海事思想は大いに發達し、種々の冒險は種々の人に依て企てられた。小笠原貞頼が小笠原島を發見したのも此時代である。

彼の大阪城沒落以後、其の落武者の中には四國九州思ひ〳〵の地點から南洋方面へ走つた者もある。又た天主教を奉じたが爲めに呂宋、瓜哇等へ追遣られた者もある。斯の如き事情で、種々の日本人が南洋方面に夥多しく入込んだのであるから、其中の然るべき人物が或一隊を率ゐて、此のレレ島に上陸し、此處を根據地として前面のクーサイ島を襲ふべく企てたものであらう。

是等の事情を綜合して考ふるに、此城は先づ足利の末世から德川の初年に至る間に築かれたものらしいが、扨其築城者の最後は何う有つたか更に判らぬ。

若しこの城を枕にして全滅したものならば、土人等の間には何等かの口碑が存して居るべき筈だが、其が何も傳はらぬのを見れ

ば、恐く此地の風土が日本人の永住に適せず、更にこゝを引揚げて、他に轉じたものであらう。彼のチャレー王の話に依ると、七八年前に獨逸官吏が日本字を刻した石を發見して持歸つたといふ僕も何か掘出物は無いかと、眼を皿にして搜し歩いたが一向に見當らない。唯だ平たく磨いた一抱え位な石に、楕圓形の溝を彫つたのを數多く見たのみであつた。僕は『日本城址考』を著す程の學者でもないから、城の穿鑿は先づ此位にして置く。

(十) 神樣の蒲燒

此島の土人は性質極めて溫柔で、南洋諸島中最も外人に親み易き種族であらうかと思はれる。

さればにや此の小島には土人と全く種族と言語を異にする獨逸人、亞米利加人、清國人、西印度人等も雜居して平和に暮して居る。米人メレンダーは以前帆船の船長であつたが、廿二年前此島に來つて土人の妻を娶り、目下は全島の商權を獨占して、椰子の實の輸出と汽船に淡水の供給とを業とし島中第一の富豪である。

清國人は廬盛德と云ひ、廣東の生れで當年廿六歳、前記メレンダー方の庖人を勤めて島中唯一の月給取である。

西印度人は一見直に其れと解るにも拘らず、本人は此の土人だと主張して其名も語らぬ、矢張り土人の妻を迎へて椰子の實を咬りながら暢氣に暮してゐる。

最後の獨逸人はカルロス君と云つて最も我意を得たる快男兒で

ある。十二年前捕鯨船に乘組んでカロリン群島に着した折柄、船は暗礁に乘上げて沈沒したので、爾來こゝの土着人となり、是も土人の妻を娶つて已に五人の子供がある。先生頗る快活な男で

『現世界に此の島ほどの樂園は無からう。家庭は圓滿、衣食住の心配は無し、實に難有い處だ。君は新聞記者だと云ふが、餘り世間に吹聽して貰ふまい。我も〳〵と押掛けて來られると、自然住み難くなるからね。』

と笑ひながら僕に語つた。

日本城址を尋ね更にカルロス君を訪ひ、其の歸途は恰も日盛だ。帽子の庇に滴る汗を拭ひながら海岸に出ると、今や本船の端艇四艘が淡水を汲むべく小川に溯つて行く所、暑氣凌ぎに一浴せう

と、僕も直に一行に加はり、櫂の音靜に波を分けて、港の西端に進むと、マンゴロップの森が海中に繁茂して、梢は所々に一團を作し、恰も綠濃き幾多の小島が散在してゐる樣だ。其の枝には無數の蟹が這つてゐる。

海中の森林は珍らしいと思ひながら、其樹間を右に左に縫うて進むと、海水は愈々澄んで底の白砂が鮮明に親はれる。鱗に美しい斑紋のある小魚が、縱横に走せ違うてゐる狀は、水族館でも見られぬ美觀だ。何れも水底を餘念なく覗いてゐると、突然二頭の鱶が船舷近く波を斷つて跳る。併し彼は素捷い、アレ〳〵と云ふ間に樹間を潛つて行方知れずになつた。

更に四五丁も進むと、海中の森は漸く絕えて、水聲滔々たる溪

川に出る。河幅は餘り廣からず、櫂は兩岸に達する位であるから櫂を止めて棹を執り徐かに流を溯る。兩岸には椰子やタコの大樹が高く聳えてゐる中を、白い鳥で長い尾を曳いたボースンや、七色八色の毛の色を飾つた美しい小鳥などが、自由自在に飛び繞つてゐる。

二哩半ほど奥へ進むと、大木が倒れて瀨を止めてゐる處があるこゝで飲料水を汲み取る準備をする。其れが濟むと一同は服を脱いで裸體になり、淺いながらも冷かな小川に游浴する。スコール以來眞の淡水に浴するのは今日が初度だ。何れも愉快々々と泳ぎ廻つてゐる中に、一人が俄に『やッ蛇だ』と叫ぶ。

驚いて水中を透し視れば、身の長約そ八尺とも思はるゝ怪物が

蜿蜒つてゐる。頭は丸いが何となく不氣味な格好で、胴の周圍は七八寸もあらう。蛇だイヤ蛇ではあるまいと評議區々で窺つてゐると、彼は騒がず泰然たるものだ。試みに銛棹で其の頭の天邊を突くと、尾を卷付るのみで、左のみに暴れもせず狂ひもせぬ。兎も角も生擒るべしと船中へ引揚げたが、重量は二貫目以上もある。持歸つて土人に聞くと、是は南洋の鰻で、彼等は何故か之を神と崇め、寧ろ恐れ敬つて祭つてゐるのだ。鰻に取つては南洋は無二の樂園である。……と安心してゐる處へ突然に銛を喰つては、鰻先生も嘸ぞ驚いた事であらう。加之も皮を剝いで蒲燒にされては、愈々お嘶にならぬ。併し味は日本の鰻と多く變らず、蓋し南洋の珍味であらう。

翌日ツガクシャといふ土人の案内で、米國婦人經營の學校を訪ふた。

（十一）孤島の佳人

南洋諸島では何處の島の周圍にも、珊瑚礁が這ひ擴がつて大洋の波を堰止め、恰も一帶の小川が島を包んでゐるかの樣に見える僕と土人とを乘せたる獨木舟は、殘月斜に椰子の梢に懸つて天將に曙けんとする頃レレ港を漕出でて珊瑚礁の內側を西へ徐に進み行く。

外には大洋の波怒つて珊瑚礁も碎けよと打寄せてゐるが、此處ばかりは水平かにして、舟は滑るが如くに進むこと八浬でコッタ

ル港に達したが、港とは名のみで人家は一軒も見えぬ。

併し風光頗る幽邃で、正面に德利のごとき形して峙つ山はマルテンスの紀念碑といふ。西暦千八百廿三年露のセニアビン號船長ルートケ少將に從つて、博物研究の爲め遙々ごゝに來つたマルテンス氏は、研鑽半にして病に罹り、遂に南洋孤島の土となつた。山は其遺蹟である。

尊敬すべき學者の記念とするには、徒らに宏大なる祠堂よりも終古翠なる此山こそ却つて相應きものであらうか。

更に行くこと四浬ばかりで、石垣を積んだ波止場に着く。こゝから上陸すると、平坦なる道路は椰子を兩側に植ゑ、海岸に沿うて東に通ずる。

道に從つて二町も行くと、爪先上りの坂路で路傍には二個の十字架を立てた歐風の墓がある。坂の上に登ると、先づ洋館と建築中の家屋とが目に着く。

白服を着て鼻眼鏡をかけた二十一二の米國美人が、笑を含んで出で來り、直ちに奥へ案内する。

幾十人の土人の乙女等が何れも洋裝で讀書してゐる一室を過ぎて、更に奥に入ると、油繪と寫眞を綺麗に飾つた室がある。四十を多く越えたらしいと思はるゝ米國婦人が、愛想好く椅子を與へて、僕に對つて兩人交る〴〵布教に就て語つてくれた。

老婦人はゼニー、オリン嬢といふ未婚者で、此島に來つて已に十四年を送つてゐる。最初に僕を迎へた若い婦人はマサチユーセ

ツト州の生れでウエルス嬢と云ひ、本國でも恐くは有數の佳人であらう。嬢は二週間前に獨逸の定期船で此處へ來たばかりで、今後五年間は寂しき孤島生活を營み、彼の憐むべき土人を教へ導く覺悟だと云ふ、流石は外國婦人だと感心した。

兩婦人が交る〴〵語る所に據れば、舊教が南洋諸島に輸入されたのは餘程の昔であるが、新教の傳道開始は百五六十年前の事に屬する。

當校の設立は西暦千八百六十六年の春で、現時はギルバート、カロリン、マーシャル三群島の處女四十名と青年四名を教育してゐる。其他の諸島の傳道は、本校卒業生に一任してあるが、何れも存外の好成績を得て居る。

六年前の暴風雨で校舍は吹倒され、食料は缺乏し、非常に困難に遭遇したが、幸に神の惠に因て恙なく、校舍も昨年の秋から新築に着手して既に大半は出來したと云ふ。

彼等は斯く語り、如何にも心から今日を滿足して居るらしい。

彼等は珍客の僕を饗するに、三ヶ月一度の定期船に依て、僅に得らるゝ食料の幾分を以てして呉れる。窓越の風は青葉の梢を渡つて涼しく、太平洋の縹渺たる海原も遠く見える。斯る絶島の山上に神の使と自信して、孤獨の幾年を送る兩孃の心根が偲ばれて、僕は一種崇高の念に堪へなかつた。

夕陽傾かんとする頃、こゝを辭して去ると、ウエルス孃は海岸まで送つて來て五年後には日本で再會せんと、溫かき手を握つて

別れを告げた。

漕ぎ出でゝ見返れば綠の樹間に洋館が仄見える。白いハンカチーフを振つて居るのは絶島の佳人であらう。

本船は已に飲料水を汲込んだので、翌る日は愈々出港する事となつた。僅かに三日の旅泊ではあるが、レレの村人は已に僕等の名まで覺えて、路上で行交ふ人々ともレウモー（今日は）の挨拶を交換するまでに親しくなつた。

元來クーサイ島の言語は聖書飜譯の爲、宣教師に依て餘程改造され規則正しくなつては居るが、矢はり重音的のものが多い。例へばクロガニガニ（犬）クソメロ（猫）ガイガイ（食ふ）マタンモラン（美人）ガシヤガシヤ（是は何だ）などゝ云ふ類である。

五日の朝十時、イザ出帆となると村人は何れも別れを惜んで、門に立つ者、海岸に走る者、或はカノーに乘つて沖まで見送りに出る者もある。全村の老若男女は總出で、ハンカチーフや帽を振る、チャレー王の庭前には獨逸の國旗を飜がへしてゐる、小兒の一團は彼のクロガニガニを牽いて、波打際まで走せ集り口々に叫んで、我々を送つて呉れた。

懷しのクーサイ島よ、優しの村人よ、島は長へに榮えよ。人は何日までも幸多かれ、南洋の風雨も此處ばかりは心して吹けと、我々も神に祈つて此島を別れた。

（十二）　啖人々種に對面

本船は此日から十九日の夕刻まで、雲と水との他には何の變化もないクーサイ島の近海に於て、日々鱶漁を試みた。獲物は三百頭に滿たなかつたが、幾多の實習と研究とは行はれた。就中ブランクトンの採集は、實に斯界に貢献する所が多い事であらうと思はれる。

十九日の月鮮かに南洋の海を照す頃、本船は帆を捲き揚げて針路を西々北に取ると、翌廿日の正午頃にはピングラプ島が水平線上に青一髮を劃するを認めた。

同島は北緯六度十分廿九秒東經百六十度五十一分三十秒に位して、カロリン群島に屬する珊瑚島の一である。

本船は島の風下に踟躕して、飛の魚漁を試むる意で、其日の暮

れんとする頃、海岸指して進行すると、椰子の木蔭に豆ほどの小さい人影が、點々として遠く見える。軈ては海岸に炎々たる火の團が、其處に此處に亂れて現はれ、其數は十三四の多きに及んだ。彼等は抑何の爲に火を焚くのであらう。

本船は先づこゝに進行を停め、飛の魚の流し網を二艘の端艇に乘せて、長田教官指揮の下に甲板から降ろしたのは、夜已に八時過であつた。

この時一個の火が波を照して此方へ近いて來る。火の正體は大松明で、四人の土人は之を高く翳して、例の獨木舟を漕いで來る何れも獰猛な人相で、僅に腰の周圍を草で掩うたのみの眞裸體である。訛ある英語で、

『船長、上つても可いか』と聞くから、

『何の用か』と尋ねる、

『煙草が欲い』と云ふ、

恐らく本船を貿易船と間違へたのであらう。ソコで船長は事の次第を告げ、斷乎として上船を謝絶すると、彼等は非常に不滿な面をして、持つたる松明を海に投棄て、何か頻に罵りながら、漕ぎ去つた。

後で聞くと、此處は周回十浬の小島に六百餘人の土人が住んでゐるので、自然生存競爭が激しく、隨つて其性質も頗る獰惡であると云ふ事である。

彼等の去つた後に豫定の如く流し網を試みたが、是は遺憾なが

ら失敗に終つた。

冬は飛の魚の漁期で無いのみか、此の邊の海水は非常に透明で加之も網目には夜光蟲が一面に懸つて、宛ら銀の珠簾を垂れた樣に光るので、魚は皆其光を避けて散つて了ふ。然れば三時間餘の奮闘に、獲る所僅かに二尾とは實に落膽せざるを得ない。

好加減に引揚げて翌午前三時、本船は再び西々北の針路を走ると、廿一日の夕刻にはデスピリー珊瑚島を遙に認めた。斯う云ふ風に毎日陸影を見ると同じ航海しても心強い。

夜に入つて本船はポネピー島附近に着いて此處に假泊した。

島は周回六十浬、カロリン群島の首府で、加之も獨逸政廳の所在地と云ふのであるから、先づ南洋諸島中の都會と稱すべき所か

と思はれる。

翌日の正午頃、此の島のランガール港に入ると、小高き丘の上には壯麗なる洋館が見えて、獨逸國旗が海風に飜へる、恐くは政廳であらう。

海岸に沿うたる家屋は何れも純然たる洋風で、從來の土人家屋を見馴れた目には、田舍漢が京を觀たほどの感が有る。

船が入港すると同時に檢疫船が來る、稅關からも來る、港務局からも來る。

と斯う書立てると甚だ物々しいが、實は北淸事件の際に軍曹として從軍し、天下の勇士を以て自ら許すホルボン君が、萬事一人で切つて廻してゐる。隨つて郵便局長も水路部長も、何でも彼

でも兼任とは豪い。

同君の談話に據ると、目下の知事はブレエデル大尉と云つて、曾て阿弗利加に駐在官たりし人。他にルドフ、ブラウクマンと云ふ少壯秘書官、醫師一名、巡査部長で土民兵指揮官を兼ねたる者一名、以上五人でカロリン群島廿四の島々を統治して行くのであるさうだ。

斯樣な簡略組織である處へ、本船が練習船と云ふので、何等の面倒もなく上陸を許可された。

此地には南洋貿易會社の支店があつて、本邦人も二名住み、又其の墳墓もあると云ふ。

故田口鼎軒氏が南洋貿易の先鞭を着けて、第一天祐丸に便乘し

來つたのも此地である。

右の次第であるから、我々は待兼ねて上陸すると、先づニツギニア土民兵に驚かされた。

濃黑い肌には胸から脊、顏から手足まで一面に黥をしてゐるが、皮膚が元來黑いので左のみ目立たぬ。

兵隊とは云へ素ッ裸で、跳足で、腰の邊に短い緋金巾がビジョーで締められてあるのみだ。此のビジョーが獨逸兵の徽章であると云ふ。

頭髮は刻煙草のやうに、細く縮れて蓬々と伸びてゐるのが、恰かも土耳其帽でも被つてゐる樣に見える。頭には簪の代りに、鳥の羽や樹の枝や草花なんどを挿してゐるが、毛が縮れてゐるので

一向に落ちさうにも無い。

そこで其容貌と來たら實に獰惡極るもので、氣の弱い婦人などが突然に之を見たら、或ひはキャッと氣絶するかも知れぬ。斯く申す拙者も初見參の砌りには、少しく悸然とした位だ。成ほど其の面構への可愛くないのも道理、此の土民兵なるものは例の啖人人種で、獨逸政府に嚴しく退治られた結果『以來は決して人間を喰べません』と、誓を立てゝ歸順した徒である。

とは言ふものゝ彼等の一部には、今も尙天下の珍味は人肉と心得てゐる不所存者が有ると聞く。

斯る物騷な連中が口を尖らして、物珍らしさうに八方から僕を取圍んだ時には、實際快い心地は爲なかつた。

（十三）二十年前の南洋貿易

啖人々種の土民兵が、此のポネピー島に來たのは、昨年以來の事である。

時の知事フリッ氏は非常の辣腕家で、阿弗利加や南洋の獨逸殖民地で、幾多の功績を擧げた人ださう。だが、此のカロリン群島に臨んでは、萬事の施政が少しく苛酷に失した。

例へば英語の使用を嚴禁し、若し之を犯したる者は流刑に處すと云つたやうな風であつたから、大いに土人の反抗を買ひ、屢々其の首級は窺はれた。殊に此島の土人は、西班牙領時代から慓悍にして戰鬪を好む人種であるから、事態益々不穩に傾き、結局ニ

ウギニア總督から二艘の軍艦と一中隊の兵士とを派遣すると云ふ騒ぎになつて、流石の土人も漸く閉息した。

其後フリッ知事はマリアナ群島に轉任したが、四十名のニウギニア兵即ち喫人々種だけは守備として殘された。

僕が今日お目に掛つたのは此の連中である。

前言ふ如く、此の兵士は容貌甚だ獰惡であるから、本島土着の人種も最初は頗る恐れて居たらしいが、現在では互に相狎れて、至極睦しい樣に見える。と云つて土着のポネピー人と云ふのも、ニウギニア兵に比較して餘り負は取らぬ。顏色こそ幾分か黑くない樣だが、是も矢張素ッ裸で、腰の周圍にはタコの葉で編んだ腰卷を垂れて居るのみだ。胸部を始めとして、腕又は股等に種々の

入墨をしてゐるが、其模樣は飛の魚や武器の形が多く、殊に胸部には日本の鎧に擬した入墨が多い。

其のむかし日本の武士が甲冑に身を固めて來た事があるので、勇士のモデルとして今も之を學んで居るのだと云ふ說もある。

女も同じく素ッ裸で、草の葉を腰に纏ふのみである。入墨は兩足だけと定つてゐる。入墨の方法はマンゴロップと云ふ樹の刺で皮膚を突き、椰子の實の汁とレモン液とを混合したものを注射するのである。

我々の上陸したランガール港は、流石にカロリン群島の首府だけあつて、白人も十數人住んで居るし、家並も亦立派なものだ。海岸に沿うた道路には、兩側に椰子を植付け、十間位毎に瓦斯燈

まで立てゝある。

商店も四軒ほど有つて、何れも日用雜貨を賣つて椰子の實を買ひ入れてゐる。

ジャルウキット會社の如きは、百萬マークの資本を以て經營してゐる。

汽船ゲルマニア號(九百噸)は、定期に香港シドニー間を航海して、各諸島を三ケ月に一度宛巡廻する。西班牙人の店は主人死去の爲め閉店し、獨逸人の店はジャルウキットの取次店見たやうなものだ。

其他に我南洋貿易會社は十五萬圓の資本金と五艘の帆船とを以て絶えず日本内地と交通して居る。

同會社の支店長は關根仙太郎氏で、東京外國語學校の卒業生高橋氏と二人で經營して居るが、店は海岸通り目貫の場所に位し、衣類や玩具や軍用ビスケット乃至鰊の油漬まで、約七百餘種の雜貨を陳列販賣して、却々繁昌してゐる。

元來この島に始めて商店の開かれたのは明治廿三年で、諸外國人中實に日本人を以て嚆矢とするのである。彼の關根氏は其時以來、廿餘年この地に住んでゐる人で、生れは東京淺草區東三筋町九番地、當年四十歳の男盛である。

斯る南洋の海島に於て、江戸ッ兒に邂逅ふとは懷しい。

扨同氏の經歷を聞くと、氏が初めて此島の土を蹈んだのは、故田口鼎軒氏や關直彦氏等の組織した南島會社の雇人として、第一

天祐丸に乘組んで來た當時である。

明治廿二年の夏、水谷新六氏が四十二噸の永勝丸で南洋諸島を探檢し、頗る有益な材料を齎して來たので、田口氏は其翌年五月十六日、自ら九十一噸三七のスクーナー型帆船に乘込んで南洋貿易に向ひ、洋燈、石油、罐詰類三四百種の雜貨を載せて、先づ小笠原島から西カロリン群島のヤップ島、パラオ島等を順次に巡つて、船中に物品を陳列しながら、手眞似や身振で可成の商賣をしたのである。

其當時は鐵砲一挺と島一つと交易が能る時代であつたから、餘程面白い珍談が有つたと云ふ事である。

船には完全なる海圖も無く、僅に水路誌に據るのみであつたが

船長たる故高岡百藏氏の力で、長途の航海も何等故障なく、ポネピー島に到着したのは其年の九月十一日であつたが、其首府はランガール港（當時は西班牙領でサシチアゴと稱してゐた）であるといふ事を知らぬ爲に、反對側のキテ港に入つた。

其日の夕刻、三艘の軍艦が沖合遠く過るを看たが、別に氣にも止めずに居ると、忽ちに轟然たる砲聲が海上の夕霧を破つて響いた。これには船中一同も驚いて、何事かと土人に聞訊すと、西班牙政府は今や土人と戰爭最中であるのだと云ふ。何にも知らずに斯んな處に乘込んで來た天祐丸の運命は何うなるであらう。

（十四）日本人の墳墓

西班牙政府と土人との衝突は、矢はり宗教の爭ひから來つたものである。

其當時基督教の新舊兩派は、南洋到る處に勢力を爭ひ、ポネピーも亦一島二派に分れて、半年に亘る戰爭を續けた。

然るに新教派は火樂缺乏の爲め、形勢日に危くなつたので、其の宣教師は辭を巧にして、反對派の土人を叛亂者なりと本國政府に誣告した。西班牙政府これを信じて、遂に軍艦派遣と云ふ騷ぎになつたが、土人も容易には屈服せず、サンチャゴの港口に城壁を築いて、其時對戰中であつたのだ。併し天祐丸乘組員は其程の事件とも知らないので、翌る日田口氏は四名の船員を引連れて軍艦に赴き、貿易許可を届け出た處が、無斷でキテ港に入るとは怪

からぬ、兎も角も一應は船内を檢査するぞとの嚴命。船の方でも事面倒と見て取つて、積荷の中からスナイドルやエムピー等の舊式銃を取出し、窃かに海へ投捨てゝ了つたが、尙他に槍刀等が殘つてゐたので、武器輸入の嫌疑を受け、十月十日まで徒らに抑留されてゐた。其中に土人は壓伏せられたので、更に西班牙政廳に出願して、同港に支店を置く事とし、彼の關根仙太郎氏以下二名をこゝに止めて、本船は十二月廿一日に歸國した。

然るに田口氏は歸京後、種々の事情の爲に南洋貿易を中止せねばならぬ事となつて、南島會社は遂に解散の悲運に陷つた。

更に悲運なるは南洋の孤島に取殘された人々の身の上で、待て暮せど本國からは何の消息もない、當年廿歳の青年關根氏は、

其後幾多の困難と闘ひつゝ、同島の名望家ヘンリー、ナニベー氏庇護の下に、椰子の輸出と雜貨の輸入を試みてゐる中に、紀州の人三本氏の出資を乞ふて一夜商會なるものを設立し、後に村山商會と改めた。

其中に日置合資會社や清水商會などゝ云ふのが出來て、南洋貿易は益々盛運に向ひ、一昨年には村山と日置とが合同して、茲に現在の南洋貿易會社が設立される事となつた。

同會社は五艘の帆船を以て頻繁に航海し、尠からざる利益を占めつゝあると云ふ。

辛苦廿年、往事を回顧すれば實に夢の樣だと關根氏は語る。奮闘の人よ、幸に健在なれ。

此の如き次第で、關根氏は兎にかく成功してゐるが、近頃は獨逸ハンブルグにジャリウキット會社が百萬マークの資本金で設立せられ、汽船ゲルマニア號(九百噸)を香港シドニー間の定期船とし、尚他にも幾多の帆船を使用して、椰子の實の買入に從事してゐる。現に日本に輸入される椰子の油は、同會社の製造に係ると云ふ位である。

又キルバート群島には清國人の商館があつて、是も數艘の商船を有し、盛に貿易に從事してゐる。

斯ういふ有樣で、南洋貿易に先鞭を着け、加之も二十ヶ年も苦心經營した日本人の商業も、漸次彼等に侵略されつゝあるのだ。思へば遺憾の事では無いか。

此の港には日本人の墓がある。西班牙時代の城壁が苔蒸して聳ゆる丘の上の護謨の岩葉が風に戰ぐ邊に、加特力教徒の共同墓地がある。新道から右に入ると、羅馬字でケー、シマザキ　明治四十年八月三十日と大理石に刻んだ墓碑が立つて居る。

島崎君は名を久藏と云ひ、福岡縣の人で日露戰爭にも從軍した勇士、凱旋後彼の村山商會に雇はれて、ポネピー島へ來るや否や不幸にも肺を患ひ、行年二十七歳を一期として、哀れ此の孤島に不歸の鬼と化つた。

異郷に於て同胞の顔を見るのも懷しいが、同胞の墓を見るのは更に懷しいやうな悲しいやうな感が湧く。

わが雲鷹丸の船長を始め、船員一同は墓前に跪づき、花を献げて歸つた。

ポネピー全島の土人は、昨年の調査に據ると、三千三百六十二人でマタラニーム、キテ、ジョケット、ナット、ウの五部落に分れて居るが、現在の各部落の勢力は上記の順序で、ウ部落は見る影もなく衰微して居る。

各部落の酋長はナ、マルクと云ひ、家柄のある血統の者から交る交るに選出されるのである。

家柄と云ふのは、恰も我國の藤原氏とか、源氏とか云ふやうな理屈で、其家から順次にナ、マルクを繼ぐ規定で、妄に動かす事を許さない。但し男が聟入して女の家を繼ぐのであつて、日本とは反對である。

斯くて酋長の榮冠を戴けば、一生働かずに、生活が能る、即ち毎日各戸を廻つて御馳走になるのである。

（十五）南洋第一の富豪

酋長の喰殘りは、之を馳走した家の者一同が頂戴し、尙其の殘餘は近所へもお裾分をする。

此のお裾分頂戴と云ふのは、彼等に取つては頗る重大なる問題で、ナット部落の一婦人は、隣家で酋長を欺待した時に、其のお裾分が犬猫にまで及んだにも拘らず、自分のみは分配に洩れたのを無念に思ひ、ランガール港の南に聳ゆる八百尺の絶壁に攀登り乳呑兒を抱へたまゝで、海中に飛び込んだと云ふ悲劇がある。

土人の自殺は前後唯此の一回あつたのみだといふのを見ても、彼のお裾分が如何なる大問題であるかゞ解る。

此の絶壁の名はパイペラと云ひ、西班牙領時代には一種の刑場に用ゐられ、此處から罪人を突き落したとも云ふ。

其眞僞は知らぬが、兎に角自殺の場所としては頗るお誂ひ向に出來てゐる。

獨逸領となつてからは、酋長欺待の風俗を禁止して、一年に三週間の勞役を土人に課し、其の結果如何に依て幾分の金を酋長に與へる事としたが、マタラニームとキテの二部落の外は尙是に服從せず、依然舊慣を固守してゐる。

總じて彼等は頑冥の保守主義で、容易に古來の風習を更めるを

肯じない。

其一例を擧れば曾て赤痢が流行した時彼等は其風習として患者の家に各自が飲食物を持寄り、唄ひ騷いで互に食事を共にしたので、片つ端から傳染した。獨逸政廳でも驚いて種々說諭を加へたが、彼等は頑として應せず、若强て禁止せんとすれば忽ち反抗するので、實に弱つたと巡査部長は語つた。何處の國でも未開人種を馭するのは容易でない。

一月二十七日は恰も獨逸皇帝の誕生日で、獨逸の治下にある各部落の酋長は、此の佳辰を祝ひ奉つるべく、四五日前からランガール港に集つて來た。僕は彼の關根君の紹介で、島中で最も强大なるマタラニーム部落の酋長ポス、バヂヤ君に面會した。年の頃は

四十前後で筋骨逞しく、眼光鋭く、土人としては稀に見る偉丈夫である。併し其の言ふ所には、更に條理もなく順序もなく、今まで天氣の話をして居るかと思ふと、忽ち飛んで村の話に移り又忽ちに戰爭の噂に變るなど、口を開く毎に話題が一々變つて來るには、聊か面喰はざるを得なかつた。

酋長が右の如く不得要領なるに引替へて、土地第一の名望家で財產家で、酋長以上の勢力ありといふ顯理何兵衛君は、談話の中に洒落を交ぜたりして、其の云ふ所も一々要領を得てゐる。

其れも其筈、土人とは云へ母は英吉利人で、加之も四五年前に歐米を漫遊し、其の歸途我が日本にも立寄つた事があるさうだ。

其際東京の二三の新聞は其の寫眞を揭げて、是は南洋革命黨の

首領で、獨逸政府に反抗してゐる御大將でござると麗々しく書れたには、本人酷く閉口したと云ふ。

年齡はもう六十に近いが元氣頗る旺盛で、家族は五十餘歲の老夫人と娘一人、キテ港の眺望の佳い所に本宅を構へてゐるが、他にも別莊二三ケ所を有し、財產は二十萬弗以上に達するとは、恐らく南洋土人中第一の富豪であらう。

獨逸政廳でも顯理君に對しては他の土人と大いに待遇を異にし英語禁止や飲酒禁止などの場合でも、顯理君だけは例外となつてゐる位である。

同君は大の日本贔屓で、能く日本人の世話をして呉れる、僕が面會を求めた時も、非常に喜んで出で迎へて『餘程以前に日本の

比叡金剛二艦が濠洲よりの歸途であらう、殆ど肉眼で國旗が見える位に本島附近を近く航行した事があつたが、其の後はスクーナー型の小帆船以外に、日本の船と云ふものは絕えて見た事が無かつた。

然るに今回農商務省の練習船が來訪したとは實に愉快に堪へぬ。聞けば萬端日本で新造したのださうだから、是非一度船內を拜見致したい』などゝ却々お世辭が好い。尙自分は眞珠養殖を試みたいと思ふが、日本の技師は來て呉れまいかなどゝ語つてゐた。

此の時、ハンブルグ學術研究會に屬する八百噸ほどの獨逸汽船ベーホー號が入港した。船長はフオン、ストロペルとと云つて曾て、南極探檢をも試みた冒險家で、ソロモン、ヴキクトリア方面

の野蠻地方を巡航して來たので、人類學の博士も便乘して居つた。

是等の人々と共に我が雲鷹丸の淺利船長、黒田漁撈長、勝伯爵及び僕は獨逸天長節の宴會に招待されて臨席する事となつた。

二十七日即ち天長節の當日は天麗かに晴渡つて南洋の浪咳かず誠にめでたい晨である。港に繫れる雲鷹丸とベーホー號は滿艦飾を施し、獨逸政廳の庭には其の國旗が飜へる。町の家々は軒から耳斯燈に至る迄總て椰子の若葉を以て飾られ、恰も我國の門松のやうに見える。

(十六)　奇々妙々の土人踊

午前八時、鐘樓から撞き出す鐘の音は祈禱會の始まる報知である。

例年は新舊兩牧師が共に祈禱を捧げるのであるが、本年は何か衝突の結果、新敎の方は手を退いて、舊敎のみが祭を司どる事となつた。祭壇には聖母マリヤと基督の像を描ける額を掛け、絹爛しい僧衣を着けた舊敎の牧師が、三拜九拜して香を焚き手を組み約一時間にして祈禱は終つた。

それから引續いて宴會が開かれる、會場は古城壁に圍まれたる公園内に設けられ、場の周圍から天井まで總て椰子の若葉を以て葺き、卓上卓下亦同じ若葉の裝飾を施して、見るから涼しげである。前面には二段の雛段を設け、是れが餘興場であると云ふから今に何んな事が始まるかと待たれる。

當日の列席者は約五十名で、我々一行とペーポー號の重なる人人及び各部落の酋長と有力なる土人等である。

一同着席するや、プレエデル知事起つて一場の挨拶あり、次で我が淺利船長は獨逸皇帝の萬歳を唱へ、三鞭酒を擧げる。終にキテの酋長が一場の演説を試みた、曰く『今日カイザル陛下の萬歳を祝する爲に此席に列する事を得たるは、陛下の治下にある吾々の實に光榮と存ずる所である。希くば微力吾々の如きをも捨て給はず、今後益々文明の恩澤に浴さしめ給へ。但し世の所謂文明には善惡二樣の意味ありと聞く、予の云ふ所のものは無論前者である』云々と、酋長先生却々乙な事を云ふ。

それから餘興に移つて、舊教派に屬する兒童の遊戯がある。

次に各島獨特の舞踊が始まる。

先づ第一はマタラニーム部落の土人五十四名が、椰子の汕を全身にテカ〳〵と塗立てゝ、タコの葉を白く晒したる腰卷を纏ひ、頭には花輪を卷いて悠然と雛段に列ぶ。各自の手の甲には椰子の莖が結び付られてある。

聽て其中の一人が聲を張上げて音頭を取ると、他の者が調子面白く聲を揃へて唄ひながら、足を踏み手を振つて、手の甲に付けたる椰子の莖を恰も四つ竹のやうに戛々と鳴らしながら踊る。何を云ふにも熱帶の日中であるから、流石の土人も三十分の後には汗がタラ〳〵流れて來る。それでも調子に乘つて無我夢中に踊り續ける。

其歌の意味は主に男女間の情事に關する事が多いので、茲に云ふを憚るが、其の一二を紹介すれば(一)昔外國船が來た時に、村内で大いに御馳走をして欵待したと云ふ意(二)昔、キテの部落と戰爭をした時に某島を占領されたが、婆と娘とが心を併せて恢復したと云ふ意、先づ斯んな類である。

これが濟むと、彼の啖人々種のニウギニア土人が、奇々妙々の舞踊を御覽に入れる。

ニウギニア土人の舞踊は天下の珍である。濃黑い顏には紅い花粉を想ひ〳〵に塗り立てゝ、縮毛の頭には鳥の羽や草花を無闇に挿したもの四十人、石油罐だの空函だのを滅茶苦茶に叩き立てゝ律も無く調子もなく勝手な事を怒鳴つて來る。中には竹筒をブウ

ブウ吹いてゐるのもある。

加之も其眞先に立つたる二人こそ見物なれ、蒸殺されはせぬかと氣配はるゝ程に、芭蕉の葉を厚く着て、一人は優なる假面を被り、他は威ある假面を着け、何とも形容の能ぬ身振で踊りながら來る。其の假面と云ふのは甚だ不器用に繪いてあるが、目皆を釣上げたり、口を一文字に結ばしたりして、一見直ちに優猛を判じ得る樣に出來てゐる。

是れ等異形の連中は、黑い肌に黑い汗を流しながら、唄ひつ踊りつ餘興場に差蒐ると、件の二個の假面を中心に唯グルグルと幾度か廻る丈の事だ。廻ては唄ひ、唄つては廻り、遂に盡る所を知らないので、見物の諸人も少しく弱つた。

當日餘興の指揮官たる巡査部長兼土民兵隊長も之には持餘して中止を命ずると、今まで夢中で踊つて居た土人の一隊は、宛から醉の醒めたる如く、ケロリとした顏をしてスタ〳〵引退つた。

因に記す、彼等土人は指揮官に對して從順なると實に驚ばかりで、假令蹈まれやうが蹴れやうが、鬼の眼に涙を泛べた迄で決して抵抗する樣な事は爲ぬ。途で我々に逢うても、側の方を小さく通る位だ。

現に寫眞を映さうと思つて彼等十四五人を整列させ、一隊中唯一人の女をも拉し來りて、右を向け左を向けと此方が種々に注文すれば、一々其の命令に從つて姿勢を崩さず整然として立つてゐる。返す〴〵も彼等は實に柔順なるものだ。

是が檳榔子の槍を片手で投げ、見事に敵の胴腹を貫いて、其肉を啖ふと云ふ怖しい人種とは見えない。が彼等一度其野性を發揮すれば、忽ち人間の肉が戀しくなるとは困つた者だ。

ニウーギニア土人の踊が右の如くにして相濟むと、差替つて踊り出したのはモトロック土人の一隊である。

之が又頗る面白い。

(十七) 手巾と石鹼の雨

モトロック土人も一隊四十名、椰子の若葉を腰に卷き、鳥の羽や口嘴を腕に結び付け、頭には船の形したる草の帽子を戴く。中にハイカラなのは胸に懷中鏡などを掛けて居る。何れも花粉で黑

い顔面を彩り、各々得意の胸を反して雛段の前に胡坐を掻く。

軈て一人が起上つて、手を振り足を振りつゝ何か云ふと、一同は聲靜に調子を合せ首を左右に振始める。

調子が漸次高くなると、同時に唄も忙しく且つ急調となる。一齣毎に右の平手で左の胸と腕とを打つて、太鼓のやうな音をさせ全身の息を一度に吐く。

調は愈々激して來ると、一同起て二列となり、太い棒を互に打合ふ。

これが非常に複雜なもので、前に後に上に下に叩き合うて、四十人は一糸亂れず、漸次に位置を轉じながら再び舊の位置に復る。

鹿兒島生れの吉元機關長は『薩摩の棒踊以上に發達したものだ』と感嘆の聲を洩した。

これが終るとキテ部落の踊が始まる。

前者の踊を勇壯と評すれば、是は寧ろ粋なものと評して可からう。

土人の一隊六十人は月桂樹に似た木葉を、捻鉢巻といふ格で頭に巻付け、新しい櫂を小脇に抱へて雛段にズラリと立ち列ぶ。喉自慢の若者が木遣崩しの樣なのを器用に唄ふと、觀客の方から一度に聲が掛つて、白いハンカチーフや石鹸などがバラ〳〵飛んで雛段に落ちる。音頭取の得意想ふべしだ。

やがて唄に合せて六十人が調子を揃へ、手に〳〵持つたる櫂で前の板を叩いては前に突出し又後に引く、其手際が頗る鮮かで面

白いものだ。

何しろ是は一般に大受で、土人の娘三四人は態々雛段の前まで進んで、煙草四五本を投げて行つた。

何處の國でも氣の利た踊ッ子は、女の眼眉が多いと見える。

續いてピングラップや、ランガールの踊が有つたが、踊は何れも却々發達したもので、唄の調子も單調で無い。

彼のニューギニアの踊を除いては、今日の餘興何れも大成功で南洋の土人も隅へは置かれぬと敬服した。

斯くて餘興も滯りなく順次に演じ了つて、お極り文句の樣ではあるが主客歡を盡し、目出たく散會したのは午後五時頃で、茲に鳥渡無邪氣で可笑い事があつた。

獨逸政廳の令として、土人は飲酒を嚴禁されて居るが、天長節當日だけは特典を以て飲酒を許可し、ランガール町の住民には麥酒一本づゝ與ふるを例としてゐる。

然るに其の麥酒分配の役目を承はつたる巡査部長殿其人は、何時の間にか祝盃の度を過して、泥の如くに醉ひ潰れて了つた。

土人等は待難ねて麥酒頂戴の催促に及ぶと、先生既う他愛が無い『エ、面倒だ、其處らの麥酒を勝手に持つて行け』と云ふ始末。サア然うなると。土人にも却々横着な奴が有つて、是れ幸ひと一人で五六本も抱へ出したのが有る。

ソコで麥酒は疾うに出切になつたが、イエ私はまだ戴きませんと云ふのが澤山現はれた。併し一定の數だけは既う出切つてゐる

と、云つて聞かせたが却々承知しない。

一年一度の御酒頂戴に省かれて堪るものかと、不平の聲が所々に起つて、事稍や面倒になつて來た。食物の遺恨は怖しい。

斯くと聞いたる水路部長兼郵便局長北清事變の勇士といふ、長い肩書附のホルボン君はハッタと憤ほり『祝宴は今日ほど滿足に行はれた事は無い、然るに最後に至り、麥酒一本位の事で斯んな失態を來すとは實に怪からぬ。若し此事が日本人の耳へでも入つたら國辱である』と云ふ凄じい勢ひで、直に人を走らせて市中の各商店を獵らせ、何うやら斯うやら間に合せたさうだ。

巡査部長殿定めて後で叱られたであらうが、惡意でした事でも無し、深く咎むるにも及ぶまい。

我が雲鷹丸は廿七日の佳節を祝うて、翌日直ぐに出帆する筈であつたが、生憎金曜日の爲に廿九日に延期した。

僕は之を幸ひに彼の關根氏の宅に一夜を明したが、久濶で陸上に寢る事とて、梢を渡る風の音も夢を騷がして眠られず。臥床から這い出して庭前の椰子の木蔭に立つと、明月皎々として天に懸り、ランガール港は潮滿ちて金波銀波を湧してゐる。

遠く聞ゆる手風琴は土人の弄びに、近來こゝでは非常に流行るといふ事である。

南洋土人の慣習として、月明の夜は家に眠らず、家族一同海岸に立出で、涼しき夜風に吹れながら唄ひつ踊りつ夜を明すのである。

僕は千里異郷の人、海島の月夜に立つて樂の聲を聽く。遊子思郷の感と云ふ程にはあらずとも、斯る夜には樣々の思ひ出が多い。

(十八) サイパン島の日本語

本船は廿九日正午、三本檣に總帆を捲き揚げてポネピー島を出發した。其夕刻には、夕陽に映じて峙つバイペラの斷崖も幽に遠くなつた。

明れば烟波渺々たる洋上の人となつて、西の方九百浬のサイパン島に達する迄は、毎日海を眺めて暮さねばなるまいと思ふ。

卅日の夕刻に海豚の一群が南方から現はれ來つて、本船を廻りつゝ泳ぎ戯れる。海豚は一時間六十浬の速力を以て大洋を横行し

一群實に千頭の多きを數へると云ふ。

航海中の無聊に苦める實習生諸君は、好き敵御參なれと手に手に銛を把つて彼等に抛つ。其中に平野漁夫の銛は確に手應が有つたので、萬歳聲裡に曳き揚げて見ると獲物は約七尺ある。直ちに炊夫の手に料理されて、晩餐の卓上に上せられたが、其の味は殆んど鳥肉と變らぬ。海員が海豚を數ふるに、幾羽を以てすると云ふのも無理はない。其翌日も前日と同じく一羽を打止めて食卓を賑はしたが、一羽の海豚は船中五十四人が二回の膳に上つて尚餘ある位である。

越えて二月三日の午前五時半、品川出帆以來始めて海上の日出を拜した。

由來海上では日沒こそ鮮かに見られるが、日出は兎角に雲に遮られて明かに見られぬ場合が多く、日輪其頭を海上に現はすや、空も水も眞紅に燃えて、世界は夢から醒めたるが如き壯觀は、多年海上生活に慣れたる者と雖も尙且感嘆の聲を揚げる位である。

四日の早朝には、目的地のサイパン島が古城址の如き形して朝靄の間に仄見える。

同島は北緯十五度六分東經百四十五度四十九分に位して、南北十四浬東西八浬、マリアナ群島十六火山島の一である。

此の火山列島は富士火山系に屬して、小笠原島から硫黃島に續き、ファラロン、デ、パチョロス島は峰にたなびく烟の絶ゆる間

なく、常に火を噴くを以て航海者の目標となり、彼等の間では南洋の燈臺と呼ばれてゐる。右の十六島は米領グアム島に止つて富士火山系を抑へ、世界最深の海床三萬千五百五十四呎となる。

船は此日の正午、マリアナ群島の首府ガラパンの沖合に碇泊した。

此處も總て獨逸領で、ガラパンの街はサイパン島西岸にある、恐く南洋諸島に於いて最も美くしき街であらう。

ガラパン町の政廳には、知事代理と醫師の他に十人の土民兵が屯するのみで、萬事を手輕に處理してゐる。

此の島は南洋の西伯利亞と稱せらるゝだけに、各島の罪人が澤山に居る。

現にサモア、モートロック、西カロリン等の土人が五百人も住んで居るが、何れも裸體で文身を施し、獰惡の相はニューギニア土人に劣らぬ。

併し本來の本島土人はチャモロ人で、南洋諸島に於ける最も發達したる人種である。服裝も皆洋服で跣足の者は少い位、隨つてガラパンの町は市區整然として、家屋の建築もボネビー島やクーサイ島の比では無い。屋根こそタコの葉で葺いてあるが、柱其の他は總て木材を用ひ、壁は全部板である。床は高く張られて、床下には豚や鷄を飼ひ、家の周圍には生垣を綺麗に繞らして往來にも人道と車道とが明かに區別されて居る。

人口千五百人、町には西班牙人と土人の商店の他に、南洋會社

の支店もあり、球突場もあり、生活の程度も却々高い。

丘上の木立深き處にある政廳は純日本式の建築で、殊に官宅の如きは待合式と云つたやうな小粋なもので、障子から丸窓まで頗る念入に出來て居る。

若し詳細に土人の家屋を檢するならば、其の用材に日本文字で二寸板だの三寸板だのと、書かれてあるのを發見するであらう。更に家内の器具を視れば、一として日本の製作品にあらざるは無い。椰子の實を運ぶ牛車も日本製である。僕は上陸當時先づ是だけの事實を見て、甚だ意外の感に打たれて立つて居ると、一人の土人がツカ〳〵と近寄つてさも馴々しく日本語で『今日は……』と云ふ。

試みに二言三言話して見ると、彼は日本語の十位は知つて居るのだ。

聞けば彼のみでは無く、チャモロ土人で日本語の『今日は……今晩は……』位を知らぬ者は無いさうだ。

國を去つて七十日、航程四千三百七十六浬の南洋の一孤島で、親く土人から日本語を聞かうとは實に意外！　僕は尠からぬ愉快を覺えて、其の歴史を研究したいと思つた。

（十九）日本の姫さん

我國とサイパン島との交易は、餘ほど以前から行はれて、西班牙領時代に於ては交通頗る頻繁で有つた。

當時は三重縣人松永榮次郎、埼玉縣人宮崎幸助、茨城縣人清水一二の諸氏が熱心に開墾に從事し、椰子又は煙草の植付、日本の野菜の栽培等を試み、日本人も百名以上移住して居つた。

然るに明治三十年獨逸領となるや、政廳は外人に土地借用權を與へぬ爲に、彼の人々は何れも米領グアムに移つて了つた。

日本人の姿は消えても其功蹟は殘つて、今日この島に住む人々は、土人たると白人たるとを問はず、皆其遺澤に浴してゐる。即ち玉蜀黍、南瓜、葱、煙草類を產出するのは、獨逸領中この島ばかりで、是等の產物は皆日本人に耕作を敎へられた結果である。

此の如く產物に富んで居るので、土人の購賣力は他に比して頗る强く、南洋會社の支店には支店長田邊金太郎氏他に顧問磯田森

之助氏あり、店員には菊池氏他三人と一人の大工あり、何れも十年來在住して、土人間にも信用されてゐるので商賣は最も多い。清水商會の特約店は土人のホーセと云ふのが經營して、是亦却繁昌してゐる。隨つて土人の生活程度も高く、食物も果物などを用ひず、何れも米か軍用ビスケットの類を常食とし、服裝までハイカラである。球突も流行れば鬪鷄も流行る。野球のチームなども有つて、我が雲鷹丸乘組員と試合を行つた事もあつた。

無論彼等の伎倆は我々に比すれば甚だ幼稚で、一對十三といふ大失敗に終つたが、兎も角も野球でも行る位までに進歩して居るのは、頼母しいと云はねばならぬ。

初めてこゝに上陸した日、土人の話に據ると、ヒメサンと云ふ

日本婦人が住んで居るさうだ。

南洋會社の人々に聞いて見ると、確に日本の婦人が居るらしいが、何うしても避けて我々に會はぬ。何でも土人と夫婦になつて居るらしいと云ふ事だ。

斯る絶島に渡來して土人と一所に暮してゐる程の女ならば、定めて幾多のローマンチックの經歴があるに相違ない。是非一度會つて見たいと、ガラパンの町を殆ど軒別に訪ね歩いた。二日目の午後二時頃、棉の木の蔭に洗濯してゐる土人の女を捉へて『ヒメサンを知つてゐるか』と問へば『知つてゐる』と云つて案内して呉れた。僕は種々の想像を胸に描きながら、其女の後に蹤いて町外れの茅屋へ行く。

案内の土人が此家だと教ふるまゝに、裏口から入つて行くと、檳榔子の實を嚙りながら八歳位の男の兒と遊んで居る女がある。風俗は一見土人と異らぬが、其の長い髪に黄楊の櫛を差して居るのが何より證據だ。馴々しく近寄つて『あなたは日本の方でせう』と聲をかけたが女は素知らぬ顏。更に摺寄つて『え、然うでせう日本人でせう』と問ひ詰めると、彼女は土人式に頤で掬つてウンと首肯いた。

茲に於てか白服を着けたる僕が蹲踞む、跣足で半裸體の彼女が恥しげに語る。

彼女は三州大濱の生れで岡崎たけと云ひ、明治三十五年即ち彼女が廿六歳の時に、水谷新六氏の下女として烏島に渡つて居た砌

熱病に罹つて生命も既に旦夕に迫るといふ重態に陷つた。之を親切に看護したのは現在の夫ホーセ、ターマンである。ターマンは此のサイパン島土着のチャモロ人で、去る三十年中南洋土人踊といふ看板で、淺草公園の觀世物小屋に買はれて行つたのが、流れ流れて烏島に渡り、何時か彼のおたけと懇意になつたのだ。

土人とは云へ一度は日本東京の淺草を廻つて來た男であるから日本人とは幾許か話も合ふと云ふ譯で、自然親しくして居る中に女は右の大病、男は其際親身も及ばぬまでに手厚く介抱したので人種こそ違へ其親切に絆されて、女は遂に心を許した。

斯くて其の翌々年ターマンとおたけの夫妻は獨逸人フエザーの所有船ガラパン號に便乘して、男の故郷サイパン島ガラパン町に

歸つて夫妻睦じく暮すこと已に七年、二人の間には男女四人の子を儲けたが、末の子は舊臘病死したと云ふ。

日本に歸りたくはありませんかと問へば『いゝえ、斯んな風をしては恥しくつて歸られません、妾は是島に埋れる意です』と亂れし髮を搔上げて寂しげに笑ふ顏、潮風にこそ黑みたれ流石に日本の女の俤は有る。

思へば運命は不思議なものと今更ならねど僕は沁々感じた。庭にも日本と同じ羽色の美しき鳩の群が遊んでゐる。

（二十）同胞の消息

尙此の婦人の話に據ると、彼のガラパン號船長はフェザーであつて、頗る亂暴で評判の不良い男であつたが、其の妻女は信州松本生れのおけいと云ふ高等女學校卒業生で、獨逸語にも英語にも達し、實家は可成の資產家ださうだが、冒險的生涯を送つて見たいと云ふ心願から、異國人の船長と夫婦になつたもので、夫の不評判とは反對に妻女の評判は非常に好く、現に水夫などもアノ女王が居なければ、誰が斯んな船に働くものかと云つて居た位併し不幸にも其船は四十年の秋、暴風雨の爲に海岸へ打ち揚げられ爾來船長夫妻は何處へか立去つて了つたと云ふ。何さま岸邊には今も其の難破船が死せる鯨の如くに橫はつて居る。生ける夫妻は何處に在るだらう。異鄕に來つて思ひも寄らぬ同胞の消息を種々聞くものだ。（南洋奇談海の女王―日本婦人參照）

僕は翌る日、牛車を雇うてガラパン町を出發し、各村落を訪問した。北の方一哩ばかり行くと、ポートリコに達する。

こゝは人口百五十に滿たざる寒村で、家屋の建築はクーナイ島に似てゐる。更に進むこと二哩、プラチイト（其葉は小皿の如し）の茂れる往還を辿ると、タマバック村に着く。こゝには彼のニューギニアの啖人々種と共に、獰猛を以て知られたるサモア土人が五十人ほど棲んでゐる。此れから先は道路が未だ拓かれてゐないので、更に車を返して南へ走る。其途中で蜂と蠅とに屢々襲れたには尠からず閉口した。

約三哩も行き〳〵て、西カロリン土人の住めるオリエ村に入ると、椰子畠や煙草畠が右に左に見えて、植物の種類こそ異なれ、

其風光は日本の田舍に酷似してゐる。

それも其筈、前にも記した如く、此邊は日本人が曩に耕作を試みた土地で、目下は阿弗利加殖民地に居つた獨逸人が經營して居ると云ふ事である。

チャランゲーシの村に入ると白晝の日影は暑い。木の下に憩んで椰子の汁を啜つて居ると、一人の阿弗利加土人が馴々しげに近寄つて、覺束ない日本語で挨拶をする。

此方は土人の意で好加減に接つて居ると、イヤ大違ひで彼は日本東京府の者だと名乘る。

これはお見外れ申して飛だ失禮……と僕は少しく面喰つて、扨其の素性來歴を聞くと、成ほど東京府下には相違ないが、ずッと

遠い八丈島で、父は阿弗利加人、母は日本人といふ烏渡類の尠い混血兒で、小學校卒業の後に巡査を奉職し、更に函館の水產會社に雇はれて居たが、四五年前から此のサイパン島に渡來し、七十五圓の月給で獨逸人に雇はれて居るのだと云ふ。

年齡は既う五十六ださうだが、元氣も好く愛嬌もある。厚い口唇から眞白い齒を剝き出して『私、澤山お金を儲けたらば故鄕の八丈島へ歸るのです』と語る。可愛い男だ。

午後五時頃ガラパンの町へ歸ると、海岸の方でセールローと云ふ土人の聲が聞えた。と思ふと、其の叫びは甲から乙へと擴がつて、町中がセールローの聲に滿された。之と同時に大勢の土人が海岸に向つて走る。馭者に聞くと是は沖に船が見えたのである、

眞先に見付けた者がセールローと叫ぶと、漸次に呼び傳へて之を報知するのが此の島の習慣だと云ふ。こゝでは法螺貝を吹くと云ふやうな智慧もないと見える。兎にかく僕も遲れじと海岸へ駈け付けると、果して沖遠き所に一艘の帆船が見えた。望遠鏡を以て窺へば檣に旭日旗が飜へる。これは南洋會社の日東丸と後に解つた。

(廿二) 金色の大蜥蜴

此夕、南洋會社の樓上に於て日本人會が開かれた。

日東丸の宮田船長は廿年來南洋航海にのみ從事して居る人で、色黑く肉肥えて、海の人としては好モデルの風采を具へて居る。

席上の談話は幾多の冒險談と奇談とを以て賑された。

明治卅九年の六月、越中伏木の者で七十五歳と三十五歳と十七歳との三人の船乘が、百廿石の和船に藁を積んで北海道へ向ふ途中、濃霧の爲めに針路を誤り、何時の間にか津輕海峽を過ぎて太平洋に出たが、斯くとも知らぬ三人は運に任せて只管に走ること百廿日。其中に食料は盡きて藁を咬り、雨水を帆に浸して飲むといふ始末で、當途も無しに海上に漂うたる後、僅に一個の小さき島を見付けて上陸した。

此れマーシャル群島中の無人島で、彼の三人は椰子の實を生命の綱に、兎も角も幾十日を送つて居ると、附近の島から土人が來て見馴れぬ人間が居るに驚き、直ちに獨逸政廳へ届け出たので、係

官が出張して取調べたが何分にも言語不通、據ろなくポネピー島に連れて來て世界地圖を出して見せると、彼等は日本を指さしたので、茲に初めて其の日本人たる事が判然し、恰も入港して居つた日東丸に托して歸國せしめた。

彼等三人が故郷の伏木に歸つたのは翌る年の五月、出郷以來殆ど一ヶ年を經過したので、實家では既に世に亡き者と斷念め、其葬式さへも濟した後で有つたと云ふ。

こんな話に夜も大分更けた。

翌朝は宮田船長、勝伯爵と僕との三人は、チャランケージ村の奥にある古沼へ鴨獵に出かけた。

土人の牛車に乘つて平坦な道を走ると、サイパンの牛は馬に

劣らず、三哩の道中も卅分經ぬ間にチャランケージの村に着く。

こゝで車を乘捨てゝ裸の土人を案内に頼み、譴謨や棉の木の深林を分けて行くと、梢には怪鳥の聲が聞える。

やがて沼に近くと、パアパヤ樹に七尺大の蜥蜴が金色の頭を擡げて這ひ登るのを認めのたで、勝伯は肩にせる銃を取直すよと思ふ間も無く、一發の銃聲は樹間に響いて、大蜥蜴の骸は地に墜ちた。

沼の岸に出で見ると、周回三哩の沼には暗碧の波動かず、美しい水草の花が無邊に漂うて居るのも、却つて物凄いやうにも思はれる。

椰子の梢に攀登つて見渡すと、沼の一角には鴨の群が集つて居る。

勝伯は案内の土人を伴れて右に廻り、宮田船長と僕とは左に廻つた。尠からぬ鴨や鳩を獲て、約一時間の後舊の處へ引返して見ると、勝伯は未だ戻らぬ。其れから二時間……三時間……待てども待てども音沙汰が無い。

何時まで待つても勝伯は歸らぬ、無効とは知りつゝ聲を揚げて呼んで見たが依然返事は無い、愈々心配が嵩じて二人は行きつ戻りつ、頸を長くして四邊を見廻してゐると、軈て銃聲が聞えて勝伯の姿は草叢から現はれた。聞けば案内の土人が途を迷ふて、丈餘も茂る雜草の中に入り込み、西か東か方角を分らず、足に任せ

て無闇に歩き廻つたが、宛から八幡の藪に入つた形で、行けども〳〵舊來し路へは出ず、其中に足は疲れる腹は空る、實に困憊を極めたが、漸くに一方の活路を見出して、先づ別條なく歸り着いたと云ふ始末。

これで漸く安心して、扨今日の獲物を數へると、一行三人の分を併せて鴨八羽、鳩十二羽、蜥蜴七疋、小鳥廿餘羽といふ大獵で有つたのは好成蹟。

翌十五日の暮色蒼然たる頃、我が雲鷹丸はサイパン島に別れを告げて、折柄の東北風に帆を捲き揚げた。

彼の日東丸は明日日本に直航すると云ふので、我々も出帆前に同船を訪ふて、故國へ送るべき書信を賴むやら航海の安全を祈るやら却々忙しい。

元來船出と云ふものは非常に活氣を帶びてゐるが、又何となく人の心を動搖させて氣忙しいものだ。やがて本船は徐々として港を出る、船橋に立つて望めば彼の姫さんの家は煙波の中に隱れて綠濃き丘の上の政廳は、夕日に映じて旗の影のみ鮮に飜へる。モウ此邊はテニアン島を距る半浬の沖で、島の岸邊に咲く草花は手に取るやうに見える。

此島は無人島で、目下は獨逸人等が借地して牛豚の放牧を試みてゐると云ふ。

夕暮の色益々深くなるに連れて、一陣の疾風と共に例の驟雨が沛然として襲ひ來つた。此の時流し釣で五尺大の沖鰆を引揚げた

ので、船員一同は此の獲物を圍んで、甲板上は珍しく賑つた。十六日の朝早く、左舷に方つて西歐の古城址に似たるロタ島を望む。

波駭かざる南洋の海は春の如くのたり〳〵として、天も水も都て夢の裡にあるかとも思はれる位。船は三四浬の速力を以て南に進むと、正午には目的地のグアム島が霞の間に淡く見える。

こゝはマリアナ群島中唯一の米領で、北緯十三度廿六分東經百四十四度四十三分に位し南北三十一哩、東西六哩半。近くに連れて望遠鏡で窺へば、海岸に沿うたる椰子の樹間に人家點々として現はれ、其の繁華の樣も先づ推量られる。

(廿二) 小さい横濱

グアム島の西南端に位するアルバ灣は島中第一の良港で、海上十八浬の沖から碇泊して居る米艦サプライ號の白い形が見える。本船は午後四時信號旗を以て其承諾を得たる上、サプライ號と相駢んで浮標に繫留すると、米水兵は甲板に集つて新來の客を珍しげに眺めて居つたが、果は帽などを振つて如何にも打解けた風情に見える。

軈てサプライ號と港務局から二艘の小蒸汽船が來た。瀟洒たる正服正帽の米國官吏は書記を隨ひて我雲鷹丸に上船し、印刷した用紙に本船の性質目的等を明細に書き留め、更に二三の雜談を

逸領の無雑作にして無味乾燥なるに比すれば頗る
てゐる。殊にサプライ艦長は一行の爲に無線電話
ガニアの政廳に請求し、我々が明朝早く陸上の人
宜を與へて呉れた。
アルバ灣は我が館山灣ほどの廣さで、灣口は東に
恰も防波堤の如くに蜿蜒之れを塞いでゐるので、
に打返される毎に怒て白泡を噴く。併し船を通ず
れてあるので、出入に不便を感ぜぬのみか、灣内
は波穏かにして天然の良港である。
灣の南方に位する人家五百戸ばかりのスーマイ町には、太平洋

商業電信會社の郵便局があつて、ミッドウエ島から海底電線を
引き、小笠原島を經て日米間を連絡して居る。
此の郵便局には高い風車が仕掛けてあるが、是は常に同じ力
を以て吹く東北貿易風を利用して電氣を起して居るのだと云
ふ事だ。
スーマイ町と反對の側にピテ町と云ふのがある。此町は未だ新
開で戸數は百戸に過ぎぬが、首府アガニアに行く者の上陸地點で
荷揚の棧橋も幾多あり、日本人の商店も南洋會社及び清水商會の
支店もある。
此處からアガニア町まで乘合馬車が有つて、其里程四哩に對し
て一人一弗である。他に官廳の馬車が常に往復して居つて、マア

小さい横濱と云つたやうな所、灣頭には目下大砲の据付工事中で却々忙しさうである。

十七日の日未だ昇らぬ中に、我々はサプライ號のランチに曳かれてピテ町に上陸した。

僕は先づ清水商會の支店を訪うて米貨の兩替を賴み、黑田漁撈長と共に一臺の乘合馬車を雇うてアガニアへ行く。馭者はチャモロ土人の美少年、年は十二三歲で英語も西班牙語も可成に饒舌る午前十時、熱帶の太陽は石灰質の道路に反射して暑いこと夥多しいが、少年馭者が一度鞭を揚げると、肥馬は一散に驅つて涼風自から生ずる。

街を外れとる右に遠く開ける青田には、稻已に熟して麥藁帽を

阿彌陀に被つた土人が口笛を吹きつゝ其穗を取つてゐる。

聞ば日本人に依て傳られた稻田は、年に二度植付られて二度宛の收穫があるさうだ。

天惠とは云ひ乍ら是も日本人の恩と云はねばならぬ。小川に架たる橋梁を渡ると、道は海岸に沿うて椰子の樹間から桔梗色の海が見える。

米國政廳は一年に二萬弗を投じて、二三回づゝ路普請をやるので、アガニアまで四哩の道路は所謂平坦砥の如くである。此の四哩の間に馬車自轉車に逢ふこと數十臺で往來は頗る頻繁らしい。

約一時間でアガニアの町端に達したが、家並は比較的整つた方

で、建築はチヤモロ式の他多くは西班牙風で、白堊の壁に窓を切つた體裁は却々可い。南洋會社の支店はカイエ、デ、アミエンテに在つて硝子の陳列棚美しく、店の裝飾は銀座に出しても負を取らぬ程に立派である。支店長高津源五郎君は我々の訪問を非常に喜び、種々有益なる談話も有つて、市中見物の案内などして呉れた此日は寒暖計九十度以上で、炎熱燬くが如くであつた。

アガニアは戸數二千、人口一萬と稱せられ、小島には珍しき般賑の都會である。政廳は町の中央に在つて、宏壯なる建物の中は行政部、裁判所、登記所、經理部、稅務部、土木部、學務部、農務部、郵便部に分れ、之に隣れる兵營には三百名の守備兵が常に詰切つて居る。庭前の廣場には音樂堂、舞踊堂と野球のグラウン

ドがある。西班牙領時代よりの舊敎寺院と相列んで病院がある。僕の訪問した時には、後の空地に十萬弗の豫算を以て增築するとか云ふので、頻に地均しの最中であつた。

（廿三）グアム名物の鬪鷄

右の他に政府の事業としては製氷會社製材會社あり、又十二萬弗の豫算を以て水道敷設中である。

此の如く萬事大仕掛であるから、隨つて官吏其他の人數も多くグアム島廳だけでも官吏百五十餘名と註せられ、之に各小學校敎員及び兵士等を加ふれば、實に五百餘名の多きに上るのであらう、而も兵士の月給は廿四弗で、獨逸士民兵の三マリクに比すれば殆

ど三十二倍に當る、米國人は何處までも金力を以て世界を壓倒せんとするらしい。土人も一日の勞銀一弗であるから、其の生活程度は頗る高く、常食も椰子の實や麵包などを取らず、日本から輸入の白米で盛に肉食をしてゐる。毎朝開ける市場の賣揚額も一日五百弗に上る事は珍しくない。之に連れて雜貨店も南洋貿易會社清水商會、羽生商店を始め、米國人獨逸人等の經營せるもの頗る多く、我々旅行者に取つても何等不便を感ぜぬまでに百貨整頓して居るのは嬉しい。又別に旅館もあり、料理店もあり、球突場もある。兎にも角にもアガニアの町は北緯諸島中最も繁昌の地であると云ふ事は爭はれぬ。

鬪鷄はガジエラと稱して、グアム名物の隨一に數へても可い。

サンタクルス町を製氷會社の方へ向つて小川の清き流を渡ると、町外れの海岸寄の處に穢い板圍の一構へがある。南洋會社の高津支店長の案内で入口の戸をコト〳〵と叩くと、内から肥滿した加之も好人物らしい老土人が出て來て戸を明ける。入場料十五仙を拂ふと内へ入れて呉れる。彼は政府の許可を受けて毎月六回づゝ此處に鬪鷄を催し、入場料の全部は彼の懐中に入るのだと云ふ事だ

場内は廿坪に足らぬ狹い所であるが、幾百の鷄は鷄冠を振立てて聲勇ましく謳つてゐる。觀覽席は雛段式に作られて雨を凌ぐだけの設備は出來てゐるが、中央の鬪鷄場は約五坪の地に熱帶獨特の太い竹を結ひ繞らしたばかり、其内外には雜草繁茂してゐて、

別に是ぞと云ふ程の設備もない。

闘鶏は各飼主が自己の逸物を携へ來つて、相當の對手を求め、隨意に彼の闘鶏場で闘はせるのである。

先づ双方の鶏を見合せて充分に敵意を含ませ、頸の邊に怒毛を逆立てるを待つて、茲に左足の蹴爪に反打つたる剃刀を結び付けイデヤ勝負と放ち遣れば、二箇の鶏は互に暫時睨み合ひ、嚮て呼吸を測つて蹴合を始める。

勝負の決は極めて速いもので、最初の一撃に依て一方は心臓に致命傷を受けたが、其れでも尚屈せず、淋漓たる鮮血を浴びながら敵に向つて突進し、最後まで奮闘するのもある。或は睨み合つたまゝ双方同時に倒れるのもある。朱に染みて蹌踉きながら苦戦

惡闘して遂に敵を倒すのもある。宛ら古武士の最期を見るが如くで、實に悲壯を極めたものである。

此の間に見物人は賭を試みるのだが、其方法たるや頗る簡便なもので、茲に一人の世話人がある、彼は斯う云ふ事の周旋が大好だと云ふので、毎回無報酬で奔走してゐる變り者で、例へば一方の鶏に對して一弗又は二弗を賭ける者があれば、彼は兩方平均するまで『誰か賭ける者は無いか』と呼んで廻る。斯くして兩々の賭金が平均するに及んで、始めて闘鶏は開始せられるのであるが世話人も闘鶏者も之に對して何等の分前を貰ふのでも無い。唯だ闘鶏者の一方が勝つた場合には、敵の鶏の死骸を持歸つて凱旋を祝する夕の膳を賑すだけの事だ。併し多數の中には自分の鶏に對

して、尠からぬ金を賭けてゐるのもあると云ふ事だ。

高津氏の説明に據ると、鷄を此處へ持出すまでには却々手數が要るもので、種々特別の餌を與ふるは云ふに及ばず、左の足を物に結び付けて置くと、常に之を引くが爲めに自然左足が強くなるとか云ふので、二三ヶ月も前から養成してゐる。而もそれが二三分にして殺されるのであるから、戰敗者の遺憾察するに餘ある次第たが、是も一種の道樂で、暇を潰し金を費して、鷄合せに浮身を窶してゐるのださうだ。

（廿四）成功せる日本人

グアム島人の生活程度高きことは已に前にも記した。隨つて日

本雜貨を輸入すること一年數萬圓の多きに上り、日本帆船の入港するもの一年に六艘二十回に及ぶといふ。在留同胞は百五十餘名で、其多くは雜貨販賣に從事してゐる。此の百五十餘名の中で僕は南洋に於ける成功者として清水一二氏を擧げようと思ふ。

同氏は茨城縣古河の人で、當年三十五歳の男盛りである。以前は藥種問屋の番頭であつたが、二十歳の時に故郷を去つて南洋會社の一事務員となり、サイパン島に到着したのが抑もの初で、西班牙政府から借地權を得て、椰子の栽培に從事する中、サイパンは轉して獨逸領となつた。

獨逸政府は餘に日本人の成功を喜ばないので、彼は有望なる事業を見捨てねばならぬ破目となり、サイパン島を後にシグアム島

に渡來したのは去三十九年の頃で、爾來鋭意熱心に奮闘的生活を續け、チヤモロ土人コンセプション、ドーレスと云ふ婦人を娶つて、夫婦の仲に十三歳を頭に二男四女を設けたが、其妻は昨年十二月孤兒を遺して冥府の人となつた。而も十五年間の奮闘は彼に多大の收穫を與へ、現在米國政府から借地權を得て椰子の植付をして居るものは、トクシヤ村に一里四方、アガツ村に一哩四方、デヽト村に三千町歩、トホン村に三千四百町歩、ヘラン村に三千町歩と云ふ廣大の區域で、二十五六名の農民を使用して居る。他に帆船二艘を有して、椰子の輸出と日本雜貨の輸入を試み、アガニアに本店を置いてビテ其の他二三ヶ所にも支店を設けてゐると云ふ凄じい勢ひ、裸一貫で南洋に押渡つた一個の飄零青年が、今

は紳士として富豪として、グアム島屈指の人物と立てられて居る僕は上陸の翌日サンタクルス町に彼の自宅を訪ひ、熱帶の草花薫る庭園を眺めながら、彼が十五年間の歴史を聞いて、多大の趣味を感じた。

次の日同氏の案内に依て、其借地たるアガツ村を訪ふた。村は島の南端に位してアガニアを距ること六哩である。朝露に濕つた石灰質の路を水牛の車で急ぐと、ビテの町から左に入つて、雜木茂れる山路に差蒐る。

海に飽きた人が深山に接する心地は又格別だが、路の勾配は愈愈急になつて石高路に車の動搖か頗る烈しい。二人の話は殖産の事から始まる。椰子の木は發芽以來五六年を經ざれば實を結ばぬ

ので、獨逸政府は借地權を五年以内に限つてゐると云ふ事だ。元來獨逸領の南洋諸島は、軍事上に左したる價値があらうとも思へず、又土人を敎育した所で先天的の怠惰癖は容易に失せぬ、而て見れば寧ろ日本人を歡迎して、殖産の發達を計つた方が彼我の利益で有らうに、何故日本人を排斥する傾向があるのであらうと、清水氏は熱心に語る。

そんな話の中に、車は小高き山の頂上を走つて居る。遠く見渡せばアルパ灣頭にサアプライ號と雲鷹丸とが白き雄姿を列べて居る。それからダラ〳〵坂を降ると此處が清水氏の畠である。一哩四方の畠には未だ若々しい椰子の苗が規則正しく植ゑられて、眠草が一面に繁茂して居る。此の眠草は山火事を豫防する爲で、山

野を遊獵する人の煙草の火が萱に移つて、時々山火事を起す事があるので、萱に代ふるに眠草を以てしたのだと云ふ。

畠中の小高い所に一軒の番小屋がある。十八九の青年がズボンにシャツ一枚で鷄に餌を與つて居たが、我々を見ると叮嚀に會釋して飛んで來た。此の青年は茨城縣の生れで畠の番人ださうだ、小屋は僅に二間で鉛板屋根ではあるが風通しが好い。室内に古新聞や雜誌が散亂してゐるのは番人が、唯一の友であらう。小屋に入つて汗を拭ひつゝ見渡せば、一哩の畠は眼下に展けて、椰子の木は約一萬本に上り、五六年の後には此畠から一年二三萬圓の收入を得る筈だと清水氏は語る。可愛らしい豚の兒は珍客を迎ふるのであらう、鼻を鳴しながら馴々しく近いて來る、梢を渡る風の

他には白晝の天地蕭寂である。

(廿五) 日本人の供喰

軈て午になると、彼の青年は晝餐の準備をして呉れる。

これは南洋の竹の子ですと云つて、煑て呉れたものは頗る甘い聞けば椰子の若木の莖であると云ふ。

これは珍味と舌鼓を打つて、美しい小禽の囀づるのを聽きながら充分御馳走になつて此の番小屋を出る。

清水氏と手を携へて十町餘の細逕を辿り〳〵つアガツの村に出た。

村は海岸に沿うて一筋道に發達し、我國の宿場といふ趣がある

戸數二百に足らぬ寒村ではあるが、家造が總て西班牙風に出來てゐるので、何となく裕福に見える。

此の村にも五軒の雜貨店が有つて、其内の三軒は日本人が營むのだ。清水氏の説明に據ると、右五軒共に南洋會社清水商會の輸入雜貨を取次販賣してゐるので、其の品物は全く同一である。隨つて彼等同業者間の競爭は頗る激烈で、相互に損だと云ひながら矢はり同業咬合つて居る。掌大のグアム島の其又一村落に同胞が相軋つて、他に發展すべき幾多の有利事業を見捨てゝ居るとは實に愚の極と云はねばならぬ　イヤそればかりでない、南洋會社と清水商會とが十年來苦鬪の結果、地盤を築き上げた處へ今度新に羽生商會と云ふのが出來て、グアム丸一艘を新造し此四月

から前兩者に對抗して一競爭する計畫であると云ふ事だ。

茲に於てか兩者も勢ひ手を束ねては居られぬ、相提携して羽生商會に當る作戰準備に怠らない。此の鷸蚌の爭ひを見て取つた獨逸商人は、此際漁夫の利を占めやうと暗中飛躍を試みてゐる。

日本人は總て斯くの如くに、己れの鋤を以て己れの地盤を壞しつゝあるのだ。

南洋の貿易はグアム島ばかりで無い、英領のギルバート群島もあれば、獨逸領のニューギニア島もある。加之も其の富源は北緯諸島の比にあらず、然れば獨逸人や清國人は夙に之に目を注けて、今や盛に手を伸しつゝあると聞く。在留同胞も大いに此點に注目して大發展を期せねばなるまい。

僕はアガッ村の事情を聞いて、一層此の感を深うしたので、此に一言書き加へて置く。

僕等は村内を一巡して再び水牛の車に打ち乘り、ビテ町から端艇で本船に歸つたのは時既に日沒であつたが、此の一日の旅行は僕に多大の趣味と教訓とを與へた。記して以て清水氏に謝す。

廿一日は我が雲鷹丸の進水一周年記念日である。本船が大阪鐵工所で新造されたる以來、金華山沖の鯨漁、北オコック海の鱈漁等何れも無事に終了し、今回の南洋航海も出帆以後已に三ケ月を閲するに、曾て何等の危險に遭遇せず、又一人の病者をも出さず十分に漁撈練習の目的を果し得たのは、大に祝さねばならぬ事思ふ。

實に此の一ヶ年間の成績に依て、雲鷹丸は安心して子弟の生命を托し得る事となつたのである。

祝賀の宴は實習生の勉强室に於て、無禮講で開催された。

太洋の荒浪を乘切つて、鯨を狩り鯨を屠る血氣の若殿原が、元氣に任せて唄ひ騷ぐのであるから實に面白い。酒は航海中一切禁制であるが、酒の力を假らねば元氣が出ぬなどゝ云ふ弱い者は憚りながら一人も無い。素面で船唄、琵琶歌、詩吟といふ學生相當の藝盡しが次から次へと續出する。船中頗覆返るほどの騷ぎだ。

イヤ海上で頗覆返るなどは禁句で、斯る場合にも絶えず天候に注意して、船の安全を圖らねばならぬこと勿論である。紋切形のやうだが、實際に一同歡を盡して宴を撤したのは、夜の十一時。

翌る廿二日も快晴、今日は華盛頓の誕生日と云ふので、午前八時サプライ號と本船では滿艦飾を施して、アルバ灣頭には一大壯觀を呈した。

此夜アガニア町の舞踊堂では祝賀の餘興を催し、本船からも祝意を表する爲に柳練習生と木村實習生（共に講道館の初段）との柔道試合及伊東實習生と秋山實習生との擊劍試合を寄附する事とした。

之が非常の呼物となつて定刻前已に滿員の盛況で、米國人側の茶番や、拳闘の數々が演ぜられた後、扨てお待兼の柔道となるや『ニッポン、ジュジッ』と口々に讃へながら、拍手喝采暫時は鳴りも止まぬ光景であつた。就中擊劍は來會者の殆んど全部が初めて